

第47回大会報告

第47回大会

期日：2005年（平成17年）10月29日（土）～30日（日）

会場：九州大学

担当：第47回大会実行委員会

委員長：清水宏祐

委員：大稔哲也，西村淳一

第1日 10月29日（土）

14：00～16：50 公開講演会

17：00～17：30 奨励賞授与式

18：00～20：00 懇親会

第2日 10月30日（日）

9：20～16：30 研究発表

参加者 165名

プログラム

第1日 公開講演会 九州大学箱崎文系キャンパス 法文系講義棟1階101教室

14：00～15：20 神戸外国語大学教授 吉田 豊

「イスラム化以前の中央アジアの歴史をめぐる最近の研究動向について：

ソグド語資料とバクトリア語資料の発見と研究成果をめぐって」

15：30～16：50 明治大学教授 永田雄三

「ルネサンス期のヨーロッパとイスラム世界：「共有された」空間」

第2日 研究発表 6部会

九州大学箱崎文系キャンパス 法文系講義棟1階102, 103, 104教室

2階202, 203, 204教室

研究発表者・題目

第1部会

1. 西坂朗子・吉村作治 エジプト，アブ・シール南丘陵斜面から出土した集団埋葬について
2. 吉村作治・河合望 アブ・シール南丘陵遺跡，石積み遺構周辺の歴史的変遷
3. 齋藤正憲・馬場匡浩・篠田晋治 エジプト先王朝時代における土器製作技術について

4. 柏木裕之・吉村作治・近藤二郎 エジプト, アブ・シール南丘陵遺跡の保存整備計画案について
5. 馬場匡浩・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏 エジプト, ダハシュール北遺跡第10次調査報告
6. 吹田浩・吹田真里子 エジプト国イドゥートの壁画の修復の方法: 第3次調査における計画と成果から
7. 小高敬寛 西アジアにおける最初期の土器の展開
8. 紺谷亮一 アッシリア・レリーフ有翼精霊像に関する新知見: 岡山コレクションに見るシンメトリーの発想

第2部会

1. 三津間康幸 アルシャク朝支配下のバビロニアにおける「アラブ」
2. 有賀望 ナディートゥム制度が果たした経済的役割について
3. 高井啓介 古バビロニア期のシュメール語書簡文学の意義について
4. 小野山節 ウルの〈スタンダード〉はリラの共鳴箱に非ず
5. 前田徹 シュメール語王碑文, 年名, 王讃歌
6. 白川栄美 古代エジプト、口頭による‘パフォーマンス’: 「インテフの歌」
7. 田澤恵子 新王国時代におけるエジプト王冠とシリア・パレスティナの神々: 意義と必要性
8. 小山彰 中エジプト語の sDm pw ir. n=f 構文について

第3部会

1. 青木健 サーサーン王朝期ゾロアスター教における教義決定のシステム
2. 足立拓朗 シアルク0~III期の半月形石器の機能について
3. 大津忠彦 カスピ海南西岸域(イラン)における遺跡分布の特異性
4. 春田晴郎 コッペ・ダグ(キョペト・ダーウ)両麓地域通史の試み
5. 土谷遥子 ダレル溪谷とシンガル溪谷を結ぶヤジェイ峠及びバタフン峠ルート—パキスタン北部地方 法頭の道 現地調査: 2003(II), 2004(I)
6. 杉本智俊 エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)の成立年代
7. 江添誠 ポンペイウスの東方遠征とデカポリス
8. 山花京子 ファイアンス製品から見た都市と地方との関わり: ローマ属領時代初期のアコリス遺跡
9. 平野智洋 後期ビザンツ帝国に於ける危機認識: 領土縮小の問題と地方領土への関心から

第4部会

1. 中野さやか 初期アッバース朝の東方政策: サフルー族の活動の分析を中心として
2. 清水和裕 アブー・イスハーク文書集の概要と一文書様式に関する考察
3. 橋爪烈 スィフト・ブン・アルジャウズィー著『時代の鏡』研究: 特に10~11世紀部分の記述の史料価値について

4. 中村妙子 イマード・アッディーン・ザンギーの対ビザンツ帝国政策とシリア北部の十字軍
5. 大塚修 ペルシア語史書におけるセルジューク朝史像の変遷
6. 岡本和也 13世紀後半におけるジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交関係
7. 辻明日香 マムルーク朝のズィンミー政策：700/1301年の事例を中心に
8. 塩谷哲史 19世紀前半コングラト朝ヒヴァ・ハン国の徙民政策の展開

第5部会

1. 鈴木英明 19世紀半ばのインド洋西海域におけるドレイ交易者の活動実態：イギリスによるドレイ
交易監視活動との対応を中心に
2. 栗山保之 17世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの対外関係
3. 山口元樹 アラウィー・イルシャーディー論争と中東の指導者たち：1930年代前半における仲裁
の試み
4. 川床睦夫 ラーヤ・トゥール地域の歴史：考古資料から
5. 西尾哲夫 藤田幽谷・藤田東湖著『群書抄出 萬国文字攷』（国立民族学博物館蔵）に記されたア
ラビア文字の由来について：江戸時代後期における中東イスラム知識受容の一断面
6. 山本薫 不気味な恋人：前イスラーム期アラブの無頼詩人、タアッバタ・シャッランによる慣習
的モチーフの転倒
7. 森下信子 鳥物語の系譜
8. 加藤瑞絵 ガザーリーの「瞑想（*tafakkur*）論」に関する一考察

第6部会

1. ダニシマズ=イディリス トルコのスーフィズム：イブン・アラビー学派に属するブルセヴィーの
「存在の五次元説」に着目して
2. 高橋圭 教団組織としての「タリーカ」の成立：19-20世紀初頭エジプトにおけるタリーカの制
度化とその意義
3. 東長靖 オスマン帝国期のスーフィズム：ボスネヴィーを中心として
4. 吉田達矢 19世紀半ばのエーゲ海地域社会における人的ネットワーク：非ムスリム匪賊の活動を
中心に
5. 高畑祥子 トルコ共和国初期におけるキリスト教宣教団の活動の転換：教育政策との関連から
6. 山崎和美 20世紀初頭イランの女性定期刊行物に現れた女子教育観と実際のカリキュラム
7. 横山彰三 ペルシア語 *dāštan* を用いた動詞進行形について
8. アレズ=ファクレジャハニ 現代イラン・シーア派におけるホムスの払い手でみる個人・宗教・国
家の関係：アゼルバイジャンのアハル市の数家族のケース

研究発表要旨

(以下の要旨は、大会で配布されたプログラムに掲載されたものではなく、大会後に改めて執筆していただいたものです。題目がプログラムと変わっているものもあります。)

第1部会

1. エジプト、アブ・シール南丘陵斜面から出土した集団埋葬について 西坂朗子・吉村作治

早稲田大学エジプト学研究所を中心とする調査隊（隊長：吉村作治，現場主任：河合望）が，2003年度にアブ・シール南丘陵遺跡で実施した調査では，石積み遺構北側の丘陵斜面から，一つの木棺に納められた9体の埋葬と葦で包まれた埋葬2体の計11体からなる集団埋葬（multiple burial）が発見された。当遺跡で発見されたこの集団埋葬は，副葬品として納められた土器の年代や木棺の特徴などから，第2中間期末から新王国時代第18王朝初めに年代付けられた。この集団埋葬は，当丘陵における埋葬に直接関わる初めての資料であるだけでなく，未盗掘の状態が発見された点で，当時の埋葬習慣の研究に寄与する第1級の資料といえる。

この埋葬は，木棺や葦を用いた点では，伝統的なエジプトの埋葬形態を踏襲したものである。しかし，副葬品には所謂「ヒクソス・スカラベ」や東地中海系の水差し形黒色磨研土器の他に，エジプトでは最初期のガラス製ビーズやピアス式イヤリングなど，シリア・パレスチナ地方からの影響が強く見られる遺物が含まれた。サッカラの墓域から孤立して，当遺跡で発見された第2中間期末から第18王朝時代初めの集団埋葬は，当時の埋葬習慣の上では，どのように位置づけられるものであろうか。

そこで，本研究発表では，集団埋葬の出土状況および副葬品について概要を述べ，東デルタ，メンフィス・ファイユーム，上エジプト，ヌビアの4地域とパングレーブの計28遺跡の同時代の埋葬と比較をおこなった。ヒクソスに特徴的な埋葬形態やトルピンなどの要素は東デルタの遺跡に顕著であるが，メンフィス・ファイユーム地域では見られず，アブ・シール南丘陵遺跡で発見された集団埋葬は，メンフィス・ファイユーム地域の埋葬に一般的な特徴を示すといえる。

また，一方で，シリア・パレスチナ地方からの影響が強く見られる東地中海系の水差し形黒色磨研土器，エジプトでは最初期のガラス製ビーズやピアス式イヤリングは，東デルタ，メンフィス・ファイユーム，上エジプト，ヌビア，パングレーブのすべての地域，グループに分布しており，地域間に複雑な交流があったことが窺われた。アブ・シール南丘陵遺跡の集団埋葬に見られたシリア・パレスチナ地方からの影響を色濃く示す副葬品は，こうした当時の社会状況の一端を示すものであると捉えられた。

2. アブ・シール南丘陵遺跡，石積み遺構周辺の歴史的変遷 吉村作治・河合望

早稲田大学古代エジプト調査隊はエジプト，アブ・シール南地区に位置する丘陵において発掘調査を実施してきた。2001年の第10次調査からは，発掘区を丘陵の東から南斜面へと広げ，斜面から岩窟遺構 AKT01と石積み遺構，岩窟遺構 AKT02 を発見した。また，石積み遺構の南で中王国時代の土器集中を検出した。

本発表は、第10次調査からの5年間の調査の成果を受けて、丘陵斜面から検出された遺構の概要とその歴史の変遷について考察するものである。

丘陵斜面で検出された遺構の中で最古のものは石積み遺構である。第3王朝の階段状ピラミッドに特徴的な重層構造、および建造時の層から特徴的なビール壺などから第3王朝頃に造営されたと考えられる。階段ピラミッドとの築造技術の類似性は、石積み遺構は第3王朝頃のある王によって造営されたものである可能性が高い。

遺構の背後の斜面に穿たれた岩窟遺構 AKT02 は、地下構造が第3王朝頃のマスタバ墓に特徴的なものである。石積み遺構に帰属する地下室であると考えられる。AKT02 はシャフトの東西に部屋があるが、最初は、東室のみの構造で、東室の前庭部と西室は中王国時代に付加したものである。AKT02 の出土遺物の年代は初期王朝時代から古王国時代初期と中王国時代の大きく2つの時代に分類されるが、前者の遺物は、埋葬関連の副葬品ではなく、エジプトの初期神殿に特徴的な奉納品であり、遺構の性格の決定については、現時点では最終的な結論に至っていない。AKT02 が改変された中王国時代の遺物も埋葬に関わるものというよりは、祭祀的性格の強い様相を呈している。

岩窟遺構 AKT01 からはライオンやライオン女神などの塑像が多数出土しており、陶製のもは、様式や王名から古王国時代に年代づけられるとし、土製のもは中王国時代に複製として製作された可能性を指摘した。また同遺構では、中王国時代第12王朝に特徴的な土器が共伴している。AKT01 出土の土器は AKT02 の土器と類似しており、入口の封鎖方法も同じであることから、AKT01 と 02 は同時期に機能していたと考えられる。また、中王国時代の土器集中は、祭祀活動による供物の廃棄場所であったと考えられる。

以上のような成果から、アブ・シール南丘陵が王朝時代の開闢から崇拜の対象として発展し、古王国時代よりライオンの女神、おそらくセクメト女神の聖地となった可能性が高い。中王国時代第12王朝の中ごろから当時の復古主義の風潮と相まって祭祀活動が復活したと指摘した。

3. エジプト先王朝時代における土器製作技術について

齋藤正憲・馬場匡浩・篠田晋治

民族誌を参照する限り、土器づくりの技術は世帯内生産から専用の土器工房における大量生産へと推移したが、そこにこそ、土器製作技術上の重要な画期を見出すことができる。本発表ではエジプト先王朝時代・ナカダ文化期の土器製作技術をテーマとし、当該時期におけるその変遷について若干の考察を試みた。

ナカダ I 期ないしはそれ以前に年代付けられる黒頂土器断片、ならびにナカダ I 期以降使用されていたと推測される粘土資料について、化学組成分析ならびに焼成実験を行なった。結果、ナカダ I 期の土器製作技術は焼成窯の利用には至っていなかったものの、開放的な野焼きの段階はすでに過ぎており、さらにはより良質の粘土を活用していたことが分かった。このことから、ナカダ I 期において土器製作技術はおおいに発展していたと考えることができる。ただし、ナカダ I 期において用いられる粘土は沖積土に由来するものであり、王朝時代に使用が一般化するマール・クレイ（石灰質粘土）を利用するには至っていなか

ったことも確認された。

以上を踏まえつつ、ナカダⅡ期以降の土器技術に関しても検討を加えた。ナカダⅡb期までには回転台ならびにマール・クレイの利用が開始されていることは夙に知られている。独自に土器製作技術を発展させていたナカダ文化に新しい技術が導入され、技術情報が外部よりもたらされたことを想起させた。同時期のメソポタミアやパレスティナでは回転台が利用され、石灰質粘土の利用が一般的であったこと、ナカダⅡa期までにエジプトとパレスティナとの交流は確実に認められることから、新しい技術情報はパレスティナ方面よりもたらされたと思ふべきである。さらに、その変化が製作工程の複数にわたるものであったことに鑑みれば、陶工の移動・移住までも視野に入れた密接な交流を想定せざるを得ない。そしてその時、エジプト先王朝社会を大きく変える「刺激剤」がもたらされた可能性は低くはない。土器製作技術の変遷をたどることで見えてくる画期が、社会変化・国家形成を探る上で重要なメルクマールになり得ることは確実と思われた。

なお、本研究は早稲田大学特定課題研究助成費（2005B-409，研究代表者：齋藤正憲）を受けて実施された。

4. エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡の保存整備計画案について

柏木裕之・吉村作治・近藤二郎

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1991年よりエジプト・アラブ共和国、アブ・シール南丘陵遺跡において発掘調査を実施し、2004年までに6基の遺構を発見した。出土した遺構の調査、研究を推し進める一方、保護や保存にも取り組んできた。特に、2003（平成15）年度からは日本学術振興会科学研究費補助金「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡の保存整備計画立案のための研究」の助成を受け、保存整備計画案の提出に向けた研究会や現地試験を重ねてきた。

研究会は、遺跡の価値や特質に立脚した保存整備案を目指し、遺跡を最もよく知っている考古学や建築学の専門家がこの作業の中核を担い、劣化原因や物性を探る専門家、保存科学や修復の専門家らが支える研究体制で進められている。

当該丘陵では、古代エジプト王朝時代を通じた活動の痕跡が認められ、しかも王や王子に関わるなどいずれも資料的価値が高い。こうした丘陵遺跡全体の歴史的重層性が特質の一つといえ、その点が理解できるよう、全ての遺構が視認できる形での保存整備を目指すことが、基本方針として確認された。さらに類を見ない建築様式や遺物を含んでいたことから、復元的な手法は、遺構の特質を伝えるための必要最小限に抑えることが決められた。そして、この方針を踏まえながら、石、日乾煉瓦、岩など、建材の種類や特性、残存状況などが異なる6遺構ごとに、基本方針を最大限に生かす方法が検討された。

アメンヘテプ2世ないしトトメス4世の日乾煉瓦遺構では、劣化原因や残存状況から遺構の露出保存は困難であると判断された。そこで、遺構を視認できる次善の策として、現代の日乾煉瓦を用いたレプリカ

の作成が決められ、2003年度、2004年度の調査において、保存整備を実施した。

2005年度には斜面下から出土した石積み遺構を対象に、保存試験を実施した。石積み遺構は水分の出入りに伴う石材表面での塩類の再結晶、いわゆる塩類風化がもっとも大きな劣化原因と考えられた。露出保存を選択する限り、塩類の再結晶を防ぐことは困難である。そこで、特に風食の著しい上面を風雨から保護するため、砂を敷き詰め、塩類の再結晶をこの砂のなかで発生させる方法を採用することにした。そして、上面の保護砂の消失を防ぐ材料と方法を定めるため、石積み遺構と石材、向き、高さを揃えた小型のレプリカを造り、試験を行った。

5. エジプト、ダハシュール北遺跡第10次調査報告 馬場匡浩・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏

早稲田大学エジプト学研究所は、2004年12月22日から2005年1月14日にかけて、エジプト・アラブ共和国、ダハシュール北遺跡における第10次発掘調査を実施し、未盗掘の木棺とその中に納められたミイラを発見した。

ダハシュール北遺跡は、首都カイロから南方約25kmのナイル川西岸に位置する。元来、ダハシュール地域は古王国時代や中王国時代のピラミッドが立ち並ぶことで名を馳せてきた地域であるが、1996年に開始された発掘調査により、この地域に新王国時代の墓地遺跡が存在することが明らかとなり、学史を大きく塗り替えることとなった。これまでの調査は、「王の書記」の称号を有するイパイの大型墳墓と、その南に位置するパシエドウの墳墓を中心とする範囲を対象として進められた。その後、2004年の9次調査から発掘区域をイパイ墓から約100m西側に移し、そこで「プタハ神のウアブ・朗唱神官」の称号を持つたなる人物の墓を新たに発見した。

そこで本発表では、新区域における近年の発掘調査（9・10次調査）の成果を報告する。9次調査ではタ墓（シャフト40）に焦点を定め、地上遺構及び地下埋葬室の発掘を実施した。上地上遺構は極めて残存が悪く、南壁下の石灰岩製床面の一部を残すのみであった。しかし一方、地下の埋葬室は盗掘を受けてはいたものの比較的保存状態の良い墓主タの副葬品が数多く検出された。さらに、元来上部構造を構成していた建材及びレリーフも埋葬室やシャフト部から多数出土した。レリーフの中で特筆すべきは、「太陽神の夜の船」のシーンが彫られた一群である。雄羊の姿をとる太陽神が様々な神々と伴に船に乗り、画面上端の天からは二人の人物が手を差し伸べ、また船の前後からも二人の女神が手を差し伸べている。太陽神の上方には羽を広げたケペル、さらに軒蛇腹には二頭のヒヒが太陽に礼拝している。これは、太陽が地下世界から東の地平線に現れる時間的推移が表現されているものと考えられ、王墓以外でこの題材をこれほど大規模に扱った類例はなく、極めて重要な資料と評価できる。

10次調査では、引き続きタ墓の上部構造理解に向けた調査と、その周辺の発掘調査を目的に据えた。地上遺構の前部を半截し、そのセクション観察から施工方法と規模をほぼ確定することができた。周辺調査では、4基のシャフト墓と2基の単純埋葬墓が新たに検出された。その内一基の単純埋葬は未盗掘であ

り、女性のミイラが首飾りや指輪などの装飾品を身につけた状態でみつかった。これは新王国時代に比定される。さらに、タの墓の南側に位置するシャフト 42 も未盗掘であり、この墓の地下約 4m で未破壊の木棺が発見された。シャフト内には多くの岩が詰められていたこと、またタ墓がシャフトの上に覆い被さっていたことにより、この木棺はこれまで盗掘を免れてきたと考えられる。木棺の規模は、縦：182cm 幅：57cm 高さ：105cm と極めて大型であり、全体が黄色で塗られ、全面に銘文帯が水色で描かれている。木棺の中には、多彩色のマスクを被ったミイラが納められており、木棺に記された銘文から、この被葬者が司令官の称号を有するセヌウという人物であることが読み取れた。木棺の形態から、セヌウは中王国時代から第 2 中間期（約 4000-3500 年前）の人物と考えられ、本発見は、ダハシュール北遺跡のこれまで考えられてきた造営年代を遡上させるものとなった。

6. エジプト国イドゥートの壁画の修復の方法—第 3 次調査における計画と成果から

吹田浩・吹田真里子

「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」は、2003-2004 年度にエジプト国サッカラにある古王国時代のマスタバの地下埋葬室壁画の修復のための事前調査を行い、2005 年度より修復事業に入る。第 3 次調査(2005 年度)は、8 月を中心とする前期と 12 月を中心とする後期の 2 期に分かれる。

調査の対象は、紀元前 2360 年ごろに遡るイドゥートという名前の女性の墓の地下にある壁画である。サッカラの地下は、テーベの王家の谷の墓と異なり、多くの泥や粘土を含み、合成樹脂によって壁画を強化する方法では修復できない。そのため、壁画のはぎ取りを行うことにした。その際、対象が地下の閉鎖空間にあることから欧米風の有機溶剤を用いる方法よりも、日本式のフノリとレーヨン紙による表打ちという方法を用いる計画である。

本年度の第 3 次調査の前期での主な作業は、昨年までの事前調査で想定をこえる流入土によって遅れていた作業を終了させることであった。そのために、壁画片の回収を完了させて、その記録を作成し、シャフト部分などの図面を作成した。加えて、埋葬室内にあるクラックの安全性を確認する作業をおこなった。これには、エジプトの遺跡で行なわれるように、クラックに石膏を貼って、クラックが拡大した場合にはすぐに分かるようにした。

剥落した壁画片は、来年度に試行的に新しいサポートの上で本来の位置に張り付けたいと考えている。2007-2008 年度には、壁画のはぎ取りによる修復の進展に応じて、剥落壁画片を本格的にサポートの上で貼付けて復元する方向で準備を進めている。

剥落した壁画片は大きなものだけでも 600 を越えているが、本来の位置を確定するにはいくつかの困難がある。現在、おおよそ壁画の 3 分の 1 が残っているが、回収した壁画片は他の 3 分の 2 を復元するには足りない。行方の不明な剥落片が多くある。また、壁画片が剥落した位置から移動していることも明らかになっている。復元には、Macramallah の報告書(1935)の写真に加え、サッカラの遺跡管理事務所付属

する写真庫から、Macramallah が使用しなかった当時の写真を見つけている。ミッションは、巨大なジグソーパズルを相手にするような地道な作業を行なっていくことになる。

7. 西アジアにおける最初期の土器の展開

小高 敬寛

近年、シリア北部やトルコ南東部の発掘調査によって、西アジアにおける最初期の土器にかんして新たな資料が続々とみつかっている。本発表では、これらを編年的に再整理したうえで、どのように土器が変化していくのかを確認し、その変化の要因について若干の予察を試みた。

西アジアにおける最古級の土器の類例は、キリキア、北レヴァント、ユーフラテス川上中流、ハブール川上流、ティグリス川上流の森林・疎林帯およびその周辺でみつかり、意外なほど広範に分布することが判明してきた。これらの類例には、鉍物の混和、器面のミガキ、やや厚手の器壁、鉢形の単純な器形のみで径 20cm 内外に集中する、ほとんど装飾がみられないといった、共通の特徴が認められる。先行する先土器新石器時代の土製容器などと比較すると、最古級の土器は地域間でかなりの類似性をもっており、ある程度の技術的基盤を共有しながら製作が開始されたよううかがえる。

後続する土器はより多くの遺跡から出土しているが、明確な地域性をみせ、ユーフラテスの西側を境界として大まかに東西二つの地域的なまとまりに分けることができる。西方は最古級の土器の系譜を引き継いだ暗色磨研土器が主体となる地域であり、東方はこれまでと違いスサの混和された明色系の土器が主体となる地域である。両者は胎土や器面調整はもとより、装飾なども異なる。また、東西の双方で出土遺跡の数は増加するが、東方ではバリフ川流域などの草原部で土器が出土するようになり、分布地域が拡大する。

地域性が出現する要因を探るのは容易でないが、一つの視点として、環境的な側面があげられる。最古級の土器は森林・疎林帯やその周辺で製作が開始されたが、農耕牧畜民による草原部の開発が活発化するにつれて、草原部でも土器製作が行なわれるようになった。しかし、樹木が少なく比較的燃料に乏しい草原部では、より低火度で焼成できるスサ混和土器の製作に移行し、東方の地域性を形成していった。いっぽう、森林・疎林帯に属し燃料の豊富な西方では、最古級の土器からの技術を大きく変えることなく製作が続けられたのではなかろうか。いずれにせよこの仮説の前提には、スサを混和した明色系土器が本当に低火度で焼成可能なのか、藁や獣糞といった木材以外の燃料で高火度焼成するためには高い技術を要するのといった、いくつかの検証作業が必要であり、これらは今後の課題である。

8. アッシリア・レリーフ有翼精霊像に関する新知見：岡山コレクションに見るシンメトリーの発想

紺谷 亮一

要旨未提出

第2部会

1. アルシャク朝支配下のバビロニアにおける「アラブ」

三津間 康幸

セレウコス朝，アルシャク朝時代にかけての豊富な歴史的事件の記述を含むアッカド語史料『バビロン天文日誌』は，アルシャク朝時代にバビロニアにおいて「アラブ」と呼ばれる集団が動乱を起こしたことを伝える。

この「アラブ」が一体何者であったのか，現状では明確な結論を出すことはできない。しかし，「アラブ」による動乱の時期が前 126/5 年から前 106/5 年にほぼ限定されていることは，この「アラブ」がある種のまとまりをもった集団であったことを推測させる。

この「アラブ」による活動がこの時期になぜ激化し得たのか。ベドウィンのラクダ騎兵はこの頃新種の鞍の採用によって能力を強めていた。つまり，「アラブ」がベドウィンであったとすると，彼らの戦術的能力はこの頃向上していたことになる。また，前 120 年代前半にセレウコス朝やメセネ王国がバビロンを相次いで占領し，後半にもメセネがバビロニアの情勢に影響を及ぼしていたこと，そして前 120 年代を通じてアルシャク朝が東方の遊牧民に対して戦争を行わねばならなかったことが，バビロニアにおいて「アラブ」による動乱を許すこととなったと言えるであろう。

バビロニアにおける「アラブ」の行動は前 126/5 年に始まるが，翌年からは略奪，交通遮断，バビロンの城壁破壊等の行為にエスカレートした。このような行動に対し，当初一部のバビロン住民は贈物を与えることで対処した。しかし，それはバビロンのコミュニティを代表するような人々による行動ではなかった。前 123/2 年頃にバビロニア諸都市における抵抗が次第に組織されると，そのような行動は見られなくなっていく。しかし，そのような抵抗はすぐ効果をあげたわけではなく，前 120/19 年から 119/8 年にかけても断続的に「アラブ」による略奪が続き，バビロン住民はバビロンから疎開しなければならなかった。「アラブ」の軍事的敗北が前 112/1 年の日誌に記録されているが，これによって「アラブ」はある程度の損害を被ったと思われる。そして，前 106/5 年に「アラブ」が「ユーフラテス河畔のセレウキア」と呼ばれる都市へ退いたことは，おそらくは「アラブ」による動乱の終結を告げるものであった。

2. ナディートゥム制度が果たした経済的役割について

有賀 望

古バビロニア時代に存在が確認されているナディートゥムは，特定の神に仕え，基本的に結婚することなく，隔離された区域に居住した女性であった。彼女たちはこの特異な生活様式から研究者の注目の的となってきたが，ナディートゥム研究の決定版は未だ存在しない。本発表では，20 世紀半ばに為されたハリス (Harris, R.) の先行研究に対して，いくつかの疑問を提示し，シッパルのシャマシュのナディートゥム制度の経済的役割の位置付けを再確認しようと試みた。

ハリスは，シッパルの富裕階層が，ナディートゥム制度を利用することで，娘の結婚による財の流出に歯止めをかけることができたと言った。ナディートゥムの持参財は彼女の死後，一般の結婚における持参

財とは異なり、彼女の父の家に返還されたためである。またハリスは、ナディートゥム制度を利用することでシッパルの富裕階層は、拡大家族内の不動産の細分化に制限をかけることができたと言った。不動産は男性嫡出子により均等分割されるが、ナディートゥムに与えられた不動産は分割されないまま残るためである。ハリスは、この拡大家族の財の保全という経済的役割こそがシャマシュのナディートゥム制度の第一義的な目的であると主張した。

しかし、シッパルのシャマシュのナディートゥムの中には、バビロン第一王朝やマリの王女が含まれていたことが判明しており、家財の保全を目的に、これらの王女がシッパルへと送り込まれていたとは思われない。

また持参財の本来的な役割とは、離婚や死別により後見人を失った女性の扶養であるが、ナディートゥム持参財の役割も本質的には同様であった。ナディートゥムの場合には始めから後見人が存在せず、ナディートゥムとなった時点で即この扶養手段を必要としていたため、ナディートゥム持参財は溜め置くことよりもむしろ使用することを目的としていた。

さらに、拡大家族内の不動産の細分化を避けることができたとする主張について、いくつかの史料において、ナディートゥム持参財が彼女の父の家に返還されていない状況を窺うことができる。従って、娘をナディートゥムにすることが全て、家財の保全につながったわけではなかった。

以上のことから、シャマシュのナディートゥム制度の研究を行なうに際し、その経済的役割はあくまでも副次的役割として認識し、ナディートゥム研究を新たに進める一歩としたい。

3. 古バビロニア期のシュメール語書簡文学の意義について

高井 啓介

古バビロニア期（前 2004-1595 年）にシュメール語書簡の形式および内容が最大限に多様化し、文書庫に属する書簡、「文学的」書簡、神への嘆願の内容を持つ書簡が並存していた。ウル第三王朝期に圧倒的多数を占めた文書庫所属の書簡の多くは、簡略な公的命令や注意の行政官僚機構内での上意下達（レター・オーダー）であったが、日常的書簡がアッカド語で記されるようになったために、この時代にはその数が激減した。並行してシュメール語書簡の「文学化」の流れが顕著になる。

ウルやイシンの王達と地方行政官との間で緊急の政治問題に関して意見交換がなされた書簡においては、文書庫所属書簡の簡素な導入の書式を保持しながらも、伝達する内容は多様化かつ長大化する方向へ進み、またレター・オーダーでは必要のなかった返信も現存する。書簡「文学」とはこれらの王室書簡に、民間で取り交わされた書簡、さらには猿が母に送った書簡などの文学的虚構を加えたものを指す。現存する全てのコピーが由来する古バビロニア期の特徴として、エドゥッパと呼ばれる書記養成機関において、シュメール語書簡の様式や修辭的技法を習得するために、練習用粘土板として選択・書写・保存され、またその学習が応用されて新たに作品が生み出されたという意味において、それらの書簡は「文学的」なのである。そのような書簡「文学」の極限として、神や王への嘆願を伝達する書簡があるが、その中では「シュ

ド」「アラズ」など「祈り」「嘆願」という意味において理解されるシュメール語語彙が自覚的に用いられている。一般的な書簡文学の導入の書式は非常に簡素であったが、この際新たに神への賛辞と祝福の文言が神賛歌の定型表現を借用して付加され次第に長大化する。苦境を嘆きそこから脱出を嘆願する部分も、「文学的」（文体的・修辭的）に綿密に練り上げられている。

シュメール文学において嘆願・祈りは様々な文学形式（儀礼歌、エルシャフンガ、印章銘文等）に組み入れられて存在する。書き手が「祈り」と自覚した嘆願は、ここでは書簡という通信媒体を神像の前に安置可能かつ安価なものとして採用した。そもそも定型表現に規定される部分の多かった書簡が、公的儀礼に組み込まれないいわゆる「個人の嘆き」の表明のための手段となったときに自由な文学的表現を最大限に展開し得たという点において、古バビロニア期の「嘆願の手紙」の意義は小さくない。

4. ウルの〈スタンダード〉はリラの共鳴箱に非ず

小野山 節

シュメール都市ウルの 779 号 Meskalamdug 王墓から発掘された〈スタンダード〉は、その用途が明確でないという理由で、発見以来括弧を付けて表現されてきた。1961 年に M. Mallowan がこれをリラの共鳴箱とする説を発表すると、具体的な証拠が示されていないのにこの新説を採用する研究者が出てきた。『古代オリエント事典』に「ウル」の執筆を依頼されたとき、字数の制約から「全面モザイクの音響箱はありえない」という結論だけしか記すことができなかつたので、第 47 回大会において、その根拠を示しておきたい。

〈スタンダード〉とリラの共鳴箱とを比べてみると、Mallowan が〈スタンダード〉に酷似すると指摘した牛形リラ 8 個は、大きさに大小の違いは若干あるけれども、形はいずれも共鳴箱の輪郭を牛の側面形につくり、その前後から腕木を立てて横木を渡し、それに留金具を備えて弦の一方を止め、共鳴箱の中央に駒を挟み弦の他端を固定することによって弦楽器としたもので、前端面をモザイクで飾り、その上の腕木の前に金や銀または青銅の牛頭飾りを付けてある。

779 号墓が盗掘されたとき、牛頭飾りや留金具などの金属製品が持ち去られて、共鳴箱にあたる〈スタンダード〉の形が残ったと、Mallowan は考えたが、両者を比べてみると、目立つ 4 つの違いをはっきり認めることができる。〈スタンダード〉は、括弧内にリラの特徴を示すと、1) 全面モザイク（前端面、まれに前後両面と平面の周縁部のみ）、2) 側面長方形（牛形とくに中央に背の凹み）、3) 端面台形（逆台形か長方形）、4) 弦固定装置の痕跡なし（一方の平面に弦固定装置）と、両者の違いは明白であるから、Mallowan の指摘は誤りである。

それでは、〈スタンダード〉の用途は何だったのだろうか。用途不明品が発見されたとき、用途の限定に有効な情報は、その遺物の出土状態から得られる。4 室からなる 779 号墓の中央奥室が王の遺骸の安置所なので、その奥室から出土した〈スタンダード〉は、王の葬送にさいして、王の遺骸の直前を歩んだ旗手が持っていた、王の旗識と考えるのが、現段階ではもっとも妥当である。

ただし、この判断についてはなお疑問があるとの声が参会者から寄せられた。

5. シュメール語王碑文、年名、王讃歌

前田 徹

シュメール史の研究に王碑文は欠かせない。しかし、その利用に際しては、王碑文に書かれた事象を抜き取ることに終始し、王碑文が持つ文体や構成法は無視されてきた。碑文には碑文独自の書記法が存在し、事象を単純に記したのではないことに留意されてこなかった。それについてはルガルザゲシとサルゴンの王碑文について検討を試みた（“Royal Inscriptions of Lugalzagesi and Sargon,” *Oriens* 40, 2005, 3-30）。

シュメールの王や都市支配者が自らを表現する手段は王碑文に限らない。王碑文の他に、年名や王讃歌があった。これら3つを、王が自己を表現する方法と理解して比較検討する必要がある。本発表の目的は、こうした問題が存在することの提示である。

シュメール王碑文、年名、王讃歌の採用には時間差がある。王碑文は前 2600 年頃から、年名は前 2400 年頃から、王讃歌は前 2100 年頃からであり、2100 年のウル第三王朝時代ではこの3手段が併存することになった。そうであるので、もっぱら王碑文のみで表現した初期王朝時代と、3種が揃うウル第三王朝時代とでは、王碑文の機能が相違するはずである。たとえば、初期王朝時代ラガシュの支配者は、自らの功業を網羅的に一つの碑文に記すが、ウル第三王朝時代の王碑文では一つの事績が記念碑的に書かれるのみで、一つの碑文に網羅して書くことはない。初期王朝時代では達成した偉業が王の偉大さを表現するのに対して、ウル第三王朝時代では、王の存在自体が偉大であり、それを王讃歌で讃えることで、一々の功業を列記する必要が無くなった。王権にとっての王碑文の機能が変化している。この事例一つをとっても、王碑文、年名、王讃歌を相互連関の中で考察する必要性が認められる。

本発表では、ウル第三王朝第4代の王シュシンの王碑文・年名・王讃歌に絞って、これらの相互関連を比較検討した。

6. 古代エジプト、口頭による‘パフォーマンス’:「インテフの歌」

白川 栄美

本発表では、「竖琴弾きの歌」の中からパピルス・ハリス 500 に書かれている「インテフの歌」が、どう歌われていたかについて考察し、一つの見解を提示した。

「インテフの歌」と呼ばれる竖琴弾きの歌のテキストは、「愛の歌」が含まれた 19 王朝時代の「パピルス・ハリス 500」と、現在ライデン博物館所蔵のパアテネンハブの墓壁の断片に一部残っているテキストからなるものが一般的であり、最初の説明部分に、Hsj. w nty m Hw. t Jnj-jt=f ‘インテフ王の礼拝室にある歌’と書かれてあり、ハープ奏者は、Hsy m bnt ‘ハープを持つ歌い手’として記録されていることから、実際に歌われていた可能性がうかがえる。

テキストは、全体を通して、口頭・詩的技巧に富み、主に、最初の説明文と最後の復唱部を除く二つの

パートに分けられる。

前半部は、頭韻や同音・類音掛けなどの音掛けや同じことば、フレーズや文法型の繰り返し（反復掛け）などのことば遊びを中心にリズムが作られている：

- 1) 唇子音（w 音と p 音）の頭韻そして nfr の文頭での繰り返しという音掛けで成る対句，
- 2) 声門音（k、X、o、そして x 音）の類音掛け，両唇音（m 音）の反復，同フレーズの反復，分詞構文の反復から成るユニット，
- 3) bw における同音異義語掛け，意味の対比，歯擦音（s 音と S 音）の頭韻及び反復，sDm の反復（異なった文法型で三度），類音掛け（sD と st）から成るユニット。

後半は、六つの命令文と四つの禁止文のみで構成され、前半部分とは異なり韻などによる音掛けは見られず、音の強弱によってリズムが作られている。たいていの言語において、命令文及び禁止文は動詞や述部がある文頭に強いアクセントが置かれ、古代エジプト語も同様に、命令文及び禁止文は文頭にストレスが置かれる。よって、後半部は、強いストレスを文頭に置くことにより、歌の調子を整えていたと考えられる。

以上、各節及び句を短く簡潔に保ち、頭韻などの音遊びを作為的に含ませ、聴覚効果を目的とした詩的リズムを奏でていることから、「インテフの歌」は、実際に歌われていた、もしくは、少なくとも朗読されていたと考えられると言える。

6. 新王国時代におけるエジプト王冠とシリア・パレスティナの神々—意義と必要性 田澤 恵子

古代エジプトにおいて、王冠は王権を示す徽章であり、その威厳や威力を表現するシンボルであった。そして、王達は自らの権力を安定させ社会秩序を維持するために、王権そのものを神学的に擁護すると考えられていた特定の神々と同一視されることを望んだ。そのため、世俗の王と神聖なる神を結ぶ媒体としてこの王冠を用い、その結果、多くの神々が王冠を着用した姿で描かれることとなったのである。

このような王冠の幾つかは、新王国時代以降、エジプトで崇拜されたシリア・パレスティナ起源の神々にも適用されたことが確認できる。バアル、レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、カデシュの6柱の神の頭飾りを検証する、特定の王冠が特定の神と結びついていることがわかる。セトとの同一視からバアルと白冠の関係については議論の余地が依然残るものの、レシェフは白冠、ハウロンは二重冠とネメス頭巾、アナトはアテフ冠、アシュタルテは、白冠やナオスシストラムを着用した例はあるものの主にアテフ冠を着け、カデシュは王冠ではなく、ハトホル女神の頭飾りと数種類の付属要素をそれぞれ着用した姿で描かれることが確認された。

本発表では、この6柱の神の中から3柱の女神（アナト・アシュタルテ・カデシュ）に焦点をあて、その王冠を通して各女神について何が表現されているのかを考察した。

アナト・アシュタルテは共にアテフ冠を着用した姿で表されているが、このアテフ冠は、上下エジプト

王を意味する二重冠としての機能と、この二女神が「(太陽神)ラーの娘」とされていたことを結び付けていると考えられる。

カデシュについては、そのハトホル頭飾りから同女神との関連が明白であり、また場面に応じた付属要素からもハトホルとの関連が窺える。太陽円盤は、神話上ハトホルが太陽神と同一視されていたことを反映していると言え、カデシュのエピセツト「ラーの目」「ラーの子供」「ラーに愛されし者」は、これを補佐するように、太陽神を媒体にしてカデシュとハトホルを結び付けている。シストラムはハトホルの主要な持ち物の一つであり、ダンスと音楽の女神であったハトホルとカデシュとの関連を示していると言えよう。また、カデシュが王冠を着用していなかったことは、カデシュが王と共に図像として描かれることも、王達の公式文書に登場することもなかったことと呼応していると考えることができ、民間信仰の対象であったことを示していると言えよう。

8. 中エジプト語の sDm pw ir. n=f 構文について

小山 彰

中エジプト語の sDm pw ir. n=f 構文(受動形: sDm pw iry)に関して、現在のところ広く受け入れられている統語構造、ならびにその用法上の特徴を整理すれば以下の3点になる。

- ① sDm pw ir. n=f 構文は、3項名詞文である A_{pw}B 文の述部 A に不定詞 sDm が、主部 B に完了関係形 ir. n=f (受動形: 受動分詞 iry) が入った統語構造をしており、その逐語訳は「彼が行ったこと(受動形: 行われたこと)は、聞くことである」となる。
- ② Aに入る不定詞は、その大部分が動作動詞(verb of motion)に属する。
- ③ 新しいパラグラフを始める箇所によく用いられる。

しかしながら、上記の事項に対しては以下の問題点が存在し、この構文の分析には議論の余地がまだ多く残されている。

- ① この構文を3項名詞文とみなす統語分析は、その外形からの判断レベルに留まっており、その妥当性の検証が不足している。
- ② 本構文の分析に当たって、顧慮されていない事象が存在する。
 - ・ 動作動詞以外の自動詞の用例の存在と、他動詞の用例の非存在
 - ・ 動作主が3人称代名詞もしくは名詞句にほぼ限定されていること
- ③ パラグラフの始めによく出現するという特徴は、表層的な現象の記述に過ぎず、原因論に踏み込んだ議論がなされていない。

発表者は第46回大会において、2項名詞文である A_{pw} 文の名詞句スロットに文 S を埋め込むことで形成される擬似名詞文が、日本語の「ムードの『のだ』」に対応する S_{pw} 構文というカテゴリーを形成することを報告した。本発表では、sDm pw ir. n=f 構文をこの S_{pw} 構文というカテゴリーと結び付ける観点から分析を検討し、主として以下の結論を導いた。

- ①本構文は、sDm. n=f 形の関与する Spw 構文(完了 Spw 構文)と動詞種別-動作主の分布に関して相補的關係にあり、Spw 構文のカテゴリーに属する。
- ②本構文は、Spw 構文の「提示」機能に基づいてパラグラフの境界を画定する箇所に出現する。
- ③本構文を構成する完了関係形/受動分詞は、不定詞を修飾する限定的形容詞類である。
- ④本構文に埋め込まれている不定詞+限定的形容詞類の1項名詞文は、完了 Spw 構文に埋め込まれた(ink/NP+)sDm. n=f の動詞 iri を用いた迂言法である。

第3部会

1. サーサーン王朝期ゾロアスター教における教義決定のシステム

青木 健

ゾロアスター教神官団の変遷史：ゾロアスター教の神官団の変遷は、そのままゾロアスター教の複雑な発展史の縮図である。教祖ザラスシュトラは、自ら「ザオタル」と称し、彼の跡を承けた原始ゾロアスター教教団は、彼らの神官階級を「アースラワン」と呼んだ。ザラスシュトラ開教の地は東部イランとされているので、この地域で「アースラワン神官団」が、教祖直伝の教えを守っていたことになる。これに対して、紀元前5世紀の西部イランでは、ヘロドトスが報告しているように、その名称を「マギ」と伝えられる神官団が、曝葬、最近親婚、犠牲獣祭式など、東部の原始ゾロアスター教教団とは必ずしも相容れない風習を実行していた。而して、サーサーン王朝時代になると、ゾロアスター教がイランの国教となることで、これまで重層的に積み重なってきた神官団が一元的に組織化されるようになる。いわば、個々別々の起源と来歴を持つこれらのイラン宗教の神官団が、初めてゾロアスター教の名の下に統一的な有機体として編成されるのである。発表者が、この時期の神官団組織を、ゾロアスター教の最終完成形態と見る理由は、ここにある。

先行研究：サーサーン王朝期ゾロアスター教神官団に関する先行研究として、古くはヴィカンデルの『小アジアとイランの拝火神官』が存在する。彼の学説は今では支持されていないけれど、ゾロアスター教神官団関係の資料を整理した先駆的研究である。これに、モイーン博士論文『ゾロアスター教とペルシア文学』が続く。彼の後は、かなり年代が空いて、1980年以降に以下の3人のイラン学者が重要な論文を発表している。①フランスのジヌーは、同時代資料であるシリア語殉教者列伝やパフラヴィー語の印章・封印のデータを重視し、不完全ながら各世紀ごとのサーサーン王朝期ゾロアスター教神官団の変遷を跡付けた。②旧ソ連のペリカニアンは、6世紀のペルシア州に焦点を絞って、パフラヴィー語の法律文書とカスレ・アブー・ナスル出土の印章資料から、イランの社会制度を追究した。③ドイツのクレーイェンブルックは、9～10世紀のパフラヴィー語文献を資料として、サーサーン王朝時代の神官団の組織を類推している。

本発表の意義と目的：以上の先行研究によって、サーサーン王朝時代の神官団の概念的な組織図と、行政的神官/宗教的神官の区別が明らかになった。本発表で問題としたのは、このうち、宗教的神官団が実

際にどのような運営されていたかである。ゾロアスター教神官団が行政組織に組み込まれたのはサーサーン王朝期の特異な発展形態であって、本来は宗教教団であった筈である。そして、宗教組織である以上、聖典を頂点とする独自の「教義決定のシステム」があり、それに従って教団が運営されていたと考えられる。この問題を抜きにして静的な（そして理念的な）組織図を提示するだけでは、サーサーン王朝期のゾロアスター教神官団の文化の実像を掴み切れない。発表者は、このような観点から、サーサーン王朝期ゾロアスター教神官団における「教義決定のシステム」を明らかにした。

2. シアルク 0～III 期の半月形石器の機能について

足立 拓朗

北イランの新石器時代の研究は、東北部のサンギ＝チャガマク遺跡や西北部のハッジ＝フィルズ遺跡、北部中央のシアルク遺跡やザゲー遺跡等の成果により、編年枠が整備されてきた。しかし、カスピ海西南岸域のギーラーン州地域では新石器時代の研究は進展せず、そもそも本地域には新石器時代が存在しないとさえ推測されていた。

中近東文化センターは 2001 年度よりイラン文化遺産庁（現イラン文化遺産観光庁）と共同でギーラーン州セフィードルード川流域の一般調査を実施し、多くの遺跡を発見してきた。そして、遂に 2004 年度の調査で新石器時代遺跡を確認した。このアルゲ＝ダシュト C 遺跡はギーラーン州内で初めての新石器時代遺跡である可能性が強い。

アルゲ＝ダシュト C 遺跡では赤地黒彩の彩文土器片が表面採取されており、シアルク II 期によく見られる特徴である。しかし、このような赤地黒彩の彩文土器はシアルク 0～III-1, III-2 期まで存在する。また文様は細かなジグザグ文でシアルク II 期にのみ見られるものではない。彩文土器の特徴からでは、まだアルゲ＝ダシュト C 遺跡の時期は特定できず、新石器時代の古期の可能性もあれば、銅石器時代初期である可能性もあろう。今後の調査の進展により分析資料を増加させ、彩文土器の研究が進展することが期待される。

本発表で分析するのは、彩文土器と共に採集された半月形石器である。このような石器はシアルク遺跡で報告されており、シアルク I～III 期に伴うと考えられる。アルゲ＝ダシュト C 遺跡で採集された半月形石器は明瞭な光沢をその刃部に有しており、鎌刃に使用されたことは明白である。シアルク遺跡の半月形石器にはこのような鎌刃光沢は報告されていない。

アルゲ＝ダシュト C 遺跡の鎌刃光沢は刃部の半分のみという特殊な分布を示している。このような光沢分布を持つ鎌刃は北シリア地方の新石器時代に見られ、「バリーフ型鎌刃」として分類されている。北シリアと北イランでは距離が離れすぎており、技術伝播の可能性は低い。両地域とも幾何学形細石器の伝統をそれ以前に有していることから、半月形鎌刃は両地域で独自に成立した石器であると考えられる。しかし、同じ西アジア地域の新石器文化で使用された鎌刃であり、大きさ・製作技術・光沢分布などが非常に類似することから、両者を比較検討することにより、シアルク 0～III 期の石器文化について何らかの見通し

が得られることが期待される。

3. カスピ海南西岸域（イラン）における遺跡分布の特異性

大津 忠彦

イラン国ギーラーン州の古代遺跡が、イラン鉄器時代以降の古墓に偏っているのはなぜか(大津, 2001)。これについては、当該域における自然条件を考慮しなければならないかもしれない(Ohtsu *et al.*, 2005)。

ジャラリエ・テペ遺跡第Ⅲ層(イラン鉄器時代)出土木炭片試料分析結果ならびに森林生態調査から、当時の植生は現在のそれ(落葉広葉樹からなる森林地帯)とはそれほど異なっていなかったとみなされた(Nakamura and Zare 2005 in Ohtsu *et al.*, 2005; Noshiro 2005 in Ohtsu *et al.*, 2005)。

しかし、ジャラリエ・テペ遺跡周辺域には森林の大規模消滅域が散見される。これは夏期少雨という森林再生の難しい地域における、長期間の濫伐によると考えられ、そして急峻な地勢と相俟って「地滑り」誘発の一因となり、さらなる森林消失を惹起し、遺跡を厚い堆積層下に埋めてしまったのであろう。例えば、ジャラリエ・テペ遺跡と同じ谷筋の上位にあるドガーミヤーン遺跡(イラン鉄器時代)では、二次的な厚い自然堆積層に混じる遺物を古墓断面に認めることができる。

この研究は、日本学術振興会平成14～17年度科学研究費補助金(基盤研究B, 研究代表者:大津忠彦)および福武学術文化振興財団平成15年度研究助成金(代表研究者:大津忠彦)の交付を受けて実施された。

【参考文献】

大津忠彦, 2001, 「ターレシュ/アルボルズ山系(イラン)の先史遺跡—鉄器時代以前へのアプローチ—」, 『オリエント』第44巻第1号, 145-156頁。

Ohtsu Tadahiko, Jebrael Nokandeh, Yamauchi Kazuya edit., 2005, *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season, 2004*, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization (Tehran) and Middle Eastern Culture Center in Japan (Tokyo).

4. コッペ・ダグ(キョペト・ダーウ)両麓地域通史の試み

春田 晴郎

ホラーサーンという地域を対象をあてて、歴史を記述する、という試みは時々みられる。しかし、本発表では、あえて、コッペ・ダグ/キョペト・ダーウ(ダグ)山地の北東側、南西側に広がる山麓地域に絞って、その通史を描くことを目指す。

ただし、この両麓地域が、いつの時代にも一つのまとまりを持っていたわけではない。それどころか、多くの時代において、北東側はメルヴ、南西側はニーシャープールという大都市と密接に結びついてきた。むしろ、これら的大都市を離れて、両麓地域が歴史的に重要な存在として現れてくる数少ない時代の共通性を探ることで、従来独自に考えられることが少なかったこの地域の特徴を明らかにするとともに、それらの時代の特色をも併せて考察していく。

コッペ・ダグ両麓地域を考えるにあたっては、次のような点に注意しなければならない: 1. トルク

メニスタン領とイラン領とを分けて考察しないこと；2. 北東側のうち現在イランに属する地域、キャラートやダルギヤズ、を軽視しないこと；3. 南西側については、アトラク川流域とキャシャフ川流域とで区別せず、実際の地勢に応じて考察すること——アトラク川上流のシールヴァーン、グーチャー（ハブーチャー）からキャシャフ川上流のラードカーンを経てトゥース、マシュハドまで平野は完全に連続している。

さて、この地域を青銅器時代から通して眺めると、次の3時期がとくに重要な時期であることが判明する。すなわち、アルシャク朝パルティア時代、モンゴル時代とりわけホラーサーン総督府期、アフシャー朝ナーデル・シャーの勃興期である。牧畜民の動向が焦点となる時期ともいえる。

総じて見れば、中規模のオアシスとその後背地にこれまた中規模の牧地を有するという地理条件がクローズアップされる時が、この地域が一つのまとまりを持つ時期である。しかし、オアシスの規模はさほど大きくなく、付近に大都市が発達していくと、その大都市との結び付きが強まり両麓地域としてのまとまりは消えてしまう。

アルシャク朝の研究者が、ホラーサーン総督府やナーデル・シャーに注意を払うことはこれまでほとんどなかった。その逆も同様であろう。この地域を対象とする研究者の交流によって、新たなコッペ・ダーグ像を描くことが可能になると思われる。

5. ダレル溪谷とシンガル溪谷を結ぶヤジェイ峠及びバタフン峠ルート

パキスタン北部地方 法頭の道 現地調査：2003(II), 2004(I) 土谷 遥子

法頭伝に、高さ八丈の木造の彌勒大仏に参詣する為、法頭が401ADに葱嶺（パミール）から陀歴（ダレル）に直行したと記されている点に注目して、1991年から実施してきた研究のうち、ダレル溪谷の最奥にあるヤジェイ峠及びバタフン峠に於いて2003年と2004年に実施した現地調査の結果を検討したい。

パミールからダレルに向かう最短行程に当たるシンガル溪谷の調査（2001）は、最奥のパターロチョウキで、治安不安のため断念せざるを得なかった。又1998年から、ようやく可能になったダレル溪谷の調査（1998-2002）も最奥のヤショット村上流のハローネで、同じく治安を理由に断念した。このシンガル溪谷とダレル両溪谷を結ぶ最奥の未調査地区で、キニチッシン山（4940m）とマジヤサール高原の南方にヤジェイ峠及びバタフン峠がダレル溪谷に通じていた。

2003年調査で、シンガル溪谷のパターロ峠からマジヤサール高原を横切り、なだらかなコリバリ溪谷を辿りヤジェイ峠に達した。ダレル側下降も比較的ゆるやかで家畜の通行にも適し、ヤジェイ峠が主に利用されることが判明した。

2004年調査では、バタフン峠北壁からダレル溪谷に向かったが、最大の難所はダレル側の急勾配で、一般の通行には適さず、緊急の場合のみに利用されている状況で、バタフン峠が本道にあたるとの定説に反する知見が得られた。

ダレル溪谷の「入り口」が溪谷最上流部にある特殊性のために、幾多の峠経由路が集まる『漏斗型』峡谷に石垣と関門のある『ダルバンド』（関所）の存在が確認された。敵が怯む急峻なバタフン峠は、この関所と共に、ダレル防衛の重要な役割を果たし、一方ヤジェイ峠は移牧する家畜、牧夫一家や旅人の行路、シンガルとダレル溪谷を結ぶ本道として利用されていた。本発表は法頭がバタフン峠ではなくヤジェイ峠を辿ったとする、初に実施された調査の報告である。

6. エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）の成立年代

杉本 智俊

イスラエル国エン・ゲヴ遺跡では 1990-2004 年にかけて発掘調査が行われ、鉄器時代にケースメート式市壁と要塞、列柱式建物からなる堅固な都市が存在したことがあきらかになった。しかし、これらの建築の編年はいまだに不明確で、この遺跡の成立年代もはっきりとしていない。それは、列柱式建物に少なくとも上下 2 層が認められ、市壁はこれらの建物の基壇を支える土留めの役割を果たしているため下層の列柱式建物と同時期と考えられるのに、市壁からは列柱式建物下層よりもさらに古い土器が出土するからである。

発表者は、列柱式建物には 3 層あり、それぞれ前 8, 9, 10 世紀に年代づけられることを土器組成と遺構の両面から示した。土器組成に関しては、鉢形土器、クラテール、調理鍋、貯蔵壺の典型的な 4 つの器形を型式毎に分類し、調査地区、層毎の出土頻度を調べたところ、列柱式建物には 3 つの組成が存在すること、要塞はその中層のものと合致すること、市壁からはすべての時代の土器型式が出土することがわかった。このうち、最下層のものは北側・中間の列柱式建物とそのさらに下側に掘られた試掘溝 L510 に認められ、鉄器時代 II 期初期の土器のほか後期青銅器時代や鉄器時代 I 期に典型的な土器も見られた。南側列柱式建物と北側建物上層からは II 期初期の土器が見られたが、それより古い型式は存在せず、上層（南・中の建物の上層）からは北王国滅亡時に典型的な土器組成が認められた。

遺構に関しても、列柱式建物下層基礎部に一貫してずれが見られ、下層自体が 2 層に分かれる可能性があること、下層（北・中）と下層（南）では建材や建築方法が異なり、同じ建物とは考えにくいことを示した。さらに下層（北）の北側の試掘溝（L510）では、下層床面よりも低い所にも一つの床面があることを指摘した。エン・ゲヴのケースメート式市壁をエズレルの市壁やハツォル第 VIII 層の要塞と型式学的に結びつけ、前 9 世紀とすることも成立しないことを示した。

以上から、エン・ゲヴ遺跡の鉄器時代の層位は上・中・下 3 層（IV, V, VI 層）に区分され、前 10 世紀から始まったと捉えるべきだと結論づけた。前 10 世紀には列柱式建物の最下層（北・中）とその基壇・市壁が造られ、前 9 世紀には北上・中上、南の 3 棟が並び、前 8 世紀にはかなり小規模になった上層 2 棟が新たに造られたものと考えられる。

7. ポンペイウスの東方遠征とデカポリス

江添 誠

紀元前 63 年にポンペイウスによって、南レヴァント地方がローマの勢力下に入ったことは、フラウィウス＝ヨセフスの記述によって知られている(『ユダヤ戦記』1 巻 125 章以降)。ユダヤの支配下から解放されたことを記念して、この紀元前 63 年を紀元 1 年とするポンペイウス紀元を造幣したコインに用いる都市が現れてくるが、その代表的な都市群にデカポリスがある。

デカポリスは字義的には「10 (デカ) の都市 (ポリス)」を表し、プリニウスの『博物誌』(5 巻 16 章 74 節)には、みなが同じ都市を挙げるわけではないとしながら、ダマスカス、フィラデルフィア、ラファナ、スキュトポリス、ガダラ、ヒッポス、ディウム、ペラ、ゲラサ、カナタの 10 の都市が挙げられている。のちの碑文史料にはアビラがデカポリスの都市の一つであることが記されている。

本発表は、このデカポリスの各都市で造幣されたコインを整理、分析した上で、文献史料と照らし合わせて検討し、紀元前 63 年以降のローマ化の広がり考察する。

本発表で考察の対象とするデカポリスの都市は、文献史料に挙げられた都市のうち、発掘調査によってポンペイウス紀元を使用していることが確認されるコインが出土しているアビラ、カナタ、ディウム、ガダラ、ゲラサ、ヒッポス、ペラ、フィラデルフィア、スキュトポリスの 9 都市とした。

コインの集成については、

Spijkerman, A. 1978 : *The Coins of the Decapolis and Provincia Arabia*. Jerusalem.

Meshorer, Y. 1985 : *City Coins of Eretz-Israel and the Decapolis in the Roman Period*. Jerusalem.

Barkay, R. 2003 : *The Coinage of Nysa-Scythopolis*. Jerusalem.

の 3 文献に、近年の発掘報告書のデータを追加して、紀元前 63 年からセウェルス朝の終焉までの時代の範囲の中でローマ皇帝の即位年代ごとにコインの数を抽出し、作表を行った。

表からコインの分布を見ると、紀元後 108 年のアラビア属州の成立以降、各都市で共通して数の増加がみられるが、紀元後 1 世紀半ばまでは都市間にはかなりの差異が見られることが分かった。特に紀元前 63 年からアウグストゥス帝の即位までの間にコインを造幣しているのは、ガダラ、スキュトポリスが非常に多く、その他はヒッポス、カナタでわずかに確認されるだけである。ヨセフスの記述によると、デカポリスの都市で紀元前 63 年にポンペイウスによって再建されたのはガダラを中心にヒッポス、ペラ、スキュトポリスの 4 都市であり、ペラを除きコインの分布状況とほぼ符合している。

従来の研究ではデカポリスの結びつきはヘレニズム時代に形成されたと考えられているが、紀元前 1 世紀に造幣されたコインの状況やヨセフスの記述は、この段階でデカポリスの都市群がそれぞれに結びつき、協同して事を成すような状況を示してはいない。ポンペイウスの東方遠征で都市再建の恩恵を受けたガダラやスキュトポリスを中心に始まり、ユダヤ戦争でローマに協力した南側の都市にも拡大するなかでデカポリスというつながりが表れはじめ、ナバティア王国併合後は、新トラヤヌス街道による交易の発達に伴い、デカポリス各都市がそれぞれにローマ都市として繁栄の時代を迎えたと考えることができる。

8. ファイアンス製品から見た都市と地方との関わり：ローマ属領時代初期のアコリス遺跡

山花 京子

アコリス遺跡は中部エジプトミニヤ県にある小規模な都市遺跡である。都市の最大面積は約 14.7 ヘクタール、ローマ属領時代の最大人口は約 6 千人だったと推定されている。この遺跡は 25 年前から古代学協会と筑波大学発掘調査隊（隊長：川西宏幸筑波大学教授）によって発掘調査が進められている。

本発表では、アコリス遺跡のコプトおよびギリシア・ローマ時代の住居址の埋土表層より採集したファイアンス容器（表面にガラス質の釉のあるやきもの）片についての考察を行う。採集された数は約 210 点で、それらの大部分がローマ属領時代初期のものと推定されている。

ギリシア・ローマ時代のファイアンス容器は当時の大都市アレクサンドリアやメンフィスで製作されて、エジプト全土の都市に輸出されたと考えられており、アコリスで採集した容器片も大都市からの輸入品だったと思われる。これを検証するために、アコリス遺跡より表採したファイアンス容器の器形を分類し、他の遺跡からの類例出土分布図を示した。

シンプルな鉢形で青緑釉無文の容器が大多数を占めるアコリスに対して、アレクサンドリアなどの大都市から出土しているファイアンス容器は器種や色、そして装飾において異なることが明らかになった。つまり、アコリスにおいては、大都市にみられるような装飾性の高い容器ではなく、シンプルな形状の実用目的と思われる容器が主流だったことが窺える。

さらに、本発表ではアコリスで採集された容器片の数にも注目した。主要都市でもないアコリスで他の遺跡では類をみないほどの数の容器片が発見されている事実をどのように解釈すればよいのだろうか。ファイアンス容器が数多くもたらされる要因はどこにあったのかをアコリスの主要産業であった石灰岩の石切りと軍隊の駐屯に焦点をあて推察した。アコリスの神殿域からは石切に関係したと考えられるローマの軍団の百人隊長らが捧げた奉献碑などが複数出土している。さらに昨年再発見されたローマ時代の北の石切り場に残された奉献碑にはアコリスで切り出した石灰岩がアレクサンドリアの舗道に使われた、という記述がある。つまり、アコリスに存在した石切場の管理運営に関わるローマ属領政府直属の施設—おそらくは軍隊—の存在が推察されるのである。これを裏付けるような遺構の存在はいままでの発掘調査からは未だ発見されていないが、今後の調査により新たな知見が得られることを期待している。

9. 後期ビザンツ帝国に於ける危機認識：領土縮小の問題と地方領土への関心から

平野 智洋

パレオロゴス朝時代(1261-1453)は、ビザンツ帝国のまさに衰亡の時代である。特に 14 世紀中葉以降は内乱と、セルビア及びオスマン朝の領土蚕食により一気に領土も縮小し国家は存亡の危機に立たされる事となった。

本報告では、この対外危機と領土縮小という問題について、帝国に残された地方領土、具体例としてペロポネソス半島（モレアス専制公領）に対する同時代人の視点からの考察を試みた。報告の中で取り上げ

たのは、ディミトリオス・キドニス(Dimitrios Kydonis)とマヌイル2世・パレオロゴス帝(Manouil II. Palaiologos, 在位 1391-1425)の書簡, 及び後者の『弟セオドロスへの追悼演説』である。両者は当時を代表する知識人であると同時に同時代のビザンツ政局の中で大きな役割を担った人物でもあり, 彼らの地方領土への関心は, そのまま帝国の地方政策の方向性を決定づける要素となったと考えられる。キドニスは半島の統治者モレアス専制公宛の書簡の中で首都コンスタンティノーブルを取り巻く内的・外的な苦境と, 遠隔領土であるペロポニソスの楽天的な状況を対比させて描き出し, 同地がいわば「避難所」の役割を負うものと位置づけた。マヌイル2世は『弟セオドロスへの追悼演説』の中で多種多様な情報を我々にもたらしている。彼は対オスマン危機が首都と遠隔領土に共通の問題である事を指摘した点でキドニスとは異なる視点を示した。そして内的な支配の確立と対オスマン関係に於ける領土維持という両面を以て同地が帝国再建への橋頭堡となるであろうという将来への展望と, その途上に存在する種々の問題を具体的に言及している。両者の認識を比較する時, キドニスがペロポニソス半島を帝国存続と再建という文脈の中に捉え得なかったのに対し, マヌイル2世は同地が帝国の再建に於いて役割を負うであろうという認識にまで至ったという相違の指摘が重要なものとなろう。その背景として, 『追悼演説』がアンカラの会戦(1402)後, マヌイル帝がペロポニソスに滞在して積極的に活動した同地の状況について知見を獲得した上で記されたものである事を挙げ得る。直接的に地方領土の現状に触れ対処する事で大きく認識が進展する事を, この対比が示していると言えよう。

第4部会

1. 初期アッバース朝の東方政策: サフル一族の活動の分析を中心として

中野 さやか

本発表では, マームーン朝の治世初期のワジールであるファドル・ブン・サフルの政治活動の分析を行った。ファドルは, 内乱中マームーン陣営を指揮した人物であり, カリフをも上回る絶大な権力を掌握したが, 202年にマームーン朝に暗殺された。彼に関しては, 同時代史料が, 代々クーファの周辺に居住する一族の出身と記しているのに対し, 後代の史料ではサーサーン朝王家の末裔としている。また研究史においては, ホラーサーンの王侯として認識されており, 内乱中マームーン陣営を指揮したファドルに対する「親イラン的ワジール」という理解が, アミーン朝とマームーン朝の内乱を「アラブ対イラン」と見なす一要因ともなってきた。

こうした研究状況をふまえて, 本発表では, クーファ付近の出身のファドルが, イラン的伝統と関連付けられるようになった要因を彼の政治活動から解明し, 併せてマームーン朝のマルウ宮廷の政治情勢を分析した。

その結果, 明らかになった点は, 1) 内乱中, ファドルがホラーサーン有力者を糾合し, 東方(ホラーサーン, マーワラーアンナフル)遠征を指揮した。その成功によって, ファドルは, 東方において, マームーン朝以上の影響力を持つに至った。2) 東方遠征完了後, マルウ宮廷に召喚された東方諸地域の新改宗

者達を、ファドルはサーサーン朝の伝統を用いて懐柔した。この政策によって、ファドルはイラクやホラーサーンの有力者から、サーサーン朝の王権を復活させようと企む者と見なされるようになった。これが、サーサーン朝王家の末裔の風説が生まれた要因である。また内乱中にホラーサーン優遇政策を推進し、ホラーサーン有力者を統率したことが、研究史においてホラーサーンの王侯と認識された要因と考えられる。

絶大な権力を掌握したファドルは、歴代ワジールの中で特異な存在と理解されてきたが、実際はマフデーの治世中から続く東方政策を継承しており、内乱によって東方再征服が急速に進んだ為、それに伴って軍務と政務において、カリフ以上の権力を掌握するに至った。しかし東方遠征の成功と諸地域の諸王の恭順によって、絶大な権力を掌握したものの、同時にヒジャーズ、イラク、ホラーサーン有力層の反発を受けたために、マームーンによって排除されたのである。

2. アブー・イスハーク文書集の概要と一文書様式に関する考察

清水 和裕

イラク政権のブワイフ朝大アミールがアッバース朝カリフを庇護下におく二重政権体制の中で、アブー・イスハーク・サービーは、歴代の大アミールに書記として仕え、またカリフの発令する文書の起草に携わった。彼の残した文書集は、行政文書・政治外交文書および私的通信を含む、アッバース朝史料の巨大な山脈である。本報告は、この文書集の概要を、先行研究に修正を加えつつ明らかにし、またその一部の文書形式から、アッバース朝行政に関する新たな知見を得る試みである。アブー・イスハークは、イスラーム社会におけるマイノリティのサービー教徒出身であるが、異教徒ながらも豊富なイスラーム学とクルアーンに関する知識を習得して、有力な書記としての地位を築き上げた。彼が関与した文書は、イラク政権の中核に関わるものであり、文書の現物がほとんど残されていないアッバース朝の官給文書の体裁や様式に関する、数少ない手がかりでもある。これらを用いることで、ブワイフ朝とアッバース朝の政治・外交そして行政のあり方を、大きく明らかにすることが可能となる。一例を挙げると、任命文書（*ahd* 文書）の様式には、一定の出だしと任命の文言、そして締めくくりの定型句を持つものが存在する。この様式の存在は、カルカシャンディーの著したマムルーク朝期の書記百科『開明の書』にムハンマド時代からのものとして言及されているが、カルカシャンディーの主張と異なり、この形式が確定したのはアブー・イスハークの時代である。さらに、アブー・イスハーク文書集に収録された任命文書には、各命令節が必ずクルアーン章句で締めくくられるという顕著な特徴が存在する。この特徴的な形式はアブー・イスハーク以前には存在せず、彼以降にはひとつの様式として確立することから、アブー・イスハークの周辺で形成されたものが、書記の伝統として定着したものと考えられるのである。さらに具体的には、地方政権のアミールに対する任命文書に含まれるクルアーン章句を分析することにより、この文書の命令節間の相互の連関を確認し、その上でハムダーン朝アミールのブワイフ朝アミールに対する政治力学的関係が様式の上からも確認されることを明らかとした。

3. スィフト・ブン・アルジャウズィー著『時代の鏡』研究：

特に 10～11 世紀部分の記述の史料的价值について

橋爪 烈

13 世紀前半に著された歴史史料『時代の鏡 *Mirāt al-zamān fī taʾrīkh al-ʿyān*』は、天地創造より著者 Sibṭ ibn al-Jawzī 死去の年である 654/1256 年までを扱う世界史として広く知られている。またその記述は al-Ṭabarī や著者の祖父 Ibn al-Jawzī の著作だけでなく、Hilāl al-Ṣābī 著の『歴史』など、現存しない諸史料の内容を保存していること、また後のマムルーク朝期シリアの歴史家たちの記述様式に多大な影響を与えていることなどから、アラビア語歴史叙述を考える上でも重要な史料である事が指摘されている。

本発表は、この『時代の鏡』の 10～11 世紀部分の記述について、その史料的价值を探ることを目標に行った 2 段階の作業に関する報告である。

まず『時代の鏡』とされる諸写本の書誌情報を、カタログや研究書、校訂本などから可能な限り集め、それを整理した。既に Cl. Cahen や Li Guo が指摘するように『時代の鏡』諸写本は 2 系統に分類できるわけだが、発表者は本報告でその 2 系統をそれぞれ、A : al-Yūnīnī 編纂の要約版と B : 『時代の鏡』原本からの抜粋版であること、また同時に、現段階までの調査では著者 Sibṭ の『時代の鏡』原本は存在していない可能性が高いことを指摘した。さらに、A、B 両系統の写本は互いに情報を補完しあうため、両者を同時に使用する必要性があることについても指摘した。

次に『時代の鏡』の 10～11 世紀部分の史料的价值を探るため、特に同書が保存する Hilāl al-Ṣābī の散逸した歴史書からの引用部分についての考察を行った。まずは、Hilāl の歴史書の内、僅かに現存する部分からの引用について、Hilāl と『時代の鏡』の文章を比較した。すると、『時代の鏡』の文章は Hilāl の記事をかなりの割合で忠実に再現しているものの、Cahen の言うように「逐語的」に再現されたものではないことが判明した。さらに al-Rūdhrawārī の歴史書『諸民族の経験補遺』と『時代の鏡』の間で、同じ記事を Hilāl から引用している箇所を比較すると、両者が引用する Hilāl の文章があまり一致しなくなる。

以上の作業から、多くの散逸史料を保存する『時代の鏡』の 10～11 世紀部分の記述に関して、その多くを散逸史料に依拠しているものの、著者 Sibṭ の手が加わっているため、完全引用ではないこと、またそれ等の引用部分の情報を使用するには、用語法や文体、また他史料との比較を十分に行う必要があるという結論に達した。

4. イマード・アッディーン・ザンギーの対ビザンツ帝国政策とシリア北部の十字軍

中村 妙子

ビザンツ皇帝ヨハネス 2 世は 1130 年代後半から 1140 年代初めにかけて 2 度にわたり、キリキア經由シリアへの軍事遠征を行なった。十字軍の侵攻から約 40 年が経過したこの時期のシリアには 4 つの十字軍国家が並び立ち、ムスリム勢力はアレppo のイマード・アッディーン・ザンギーと南部のダマスカスを中心とするブリー朝が主要勢力となっていた。ヨハネス 2 世の遠征は 3 つの側面を持つ。第一にはビザンツ帝国とアンティオキア公国の係争地であるキリキアを獲得するためと小アジアの勢力均衡を維持する

ためにアルメニア王国を征服すること、第二にアンティオキア公国へ臣従を求めること、第三にはシリアのムスリム地域への軍事遠征である。皇帝への臣従を誓ったアンティオキア公は臣下のエデッサ伯とともに皇帝のシリア遠征に同行したが、皇帝の勢力の強大化を恐れて積極的な協力を避けた。一方、ザンギーは、531/1137年からの約1年半にわたるヨハネス2世の第一次遠征中も、自らのシリア南下政策を続けた。ビザンツ軍の行軍情報を早くから得て十字軍国家の動きを牽制するために利用し、トリポリ伯国からバーリーン要塞を、アンティオキア公国からマアツラ・アンヌアマーンとカファルターブを奪った。またダマスカス勢力下のヒムスを包囲しながら、並行してシャイザルを包囲するビザンツ・アンティオキア・エデッサ連合軍への威嚇を行ない、皇帝と2人の十字軍領主の離間を図る作戦を採った。キリスト教各勢力の中では宗教面での結びつきよりも各地域の政治が優先した。エルサレム王国とトリポリ伯国は、ヨハネス2世の第一次遠征中アンティオキアへもビザンツへも協力せず、ビザンツに征服されたアルメニア教会はエルサレムのラテン教会に接近した。また、ビザンツに臣従したアンティオキアでは、皇帝の求めにも関わらずギリシア人総主教は空席のまま、皇帝の第二次遠征のときにはラテン人総主教がアンティオキア内の政治勢力の代表としてアンティオキア公を凌ぐ勢いをもっていた。ヨハネス2世はザンギーとは最後まで直接に対戦することなく退却したが、両者の間の3回の儀礼を伴う使者交換は、戦闘と同盟の両方を視野にいたしたヨハネス2世の政策であると考えられる。ビザンツの脅威があったことはザンギーによるヒムス獲得交渉を有利にし、キリスト教勢力間の対立はのちのザンギーのエデッサ攻略に利することになった。

5. ペルシア語史書におけるセルジューク朝史像の変遷

大塚 修

カーシュガリー著『トルコ語集成』(11世紀後半)に言及がある、セルジューク朝キニク氏族起源説は、セルジューク朝期に著された他の史書の中では一切触れられない。しかしながら王朝滅亡後、キニク氏族起源説は、ペルシア語史書の中で比較的多く触れられるようになる。具体的に言えば、キニク氏族起源説は、ラシード・アッディーン著『集史』(14世紀初頭)に再登場し、その後のペルシア語史書に踏襲されていく。ちなみに、ラシードが『集史』の「セルジューク朝史」の章を執筆するにあたり典拠としたと考えられる、ニーシャープーリー著『セルジューク朝史』(12世紀後半)には、キニク氏族起源説は見られないため、ラシードは何らかの意図によりこの説を加筆したと想定される。そこで本報告では、『集史』以降のペルシア語史書でセルジューク朝の起源に関心が集まるようになる原因、及びその背景にある史家の歴史認識の変容を検証した。

報告者は、セルジューク朝の起源の変遷の原因を、ペルシア語普遍史(世界史)叙述全体の構成から再考察した。その結果、王朝の起源の変遷は、セルジューク朝のみに限られた問題ではなく、他の諸王朝にも見られることが明らかとなった。『集史』では、アッバース朝期にイランを支配した諸王朝の起源が総じて、オグズ・ハーンの末裔に帰せられる。一方、ムスタウフィー著『選史』(14世紀半ば)では、諸王朝

の起源をイランの英雄叙事詩『王書』の登場人物に結び付ける事例が多く見られる。ここでムスタウフィーは、セルジューク朝の起源について、キニク氏族に加え、アフラーシヤーブにも言及している。そしてこれ以降のペルシア語普遍史では、キニク氏族に加えアフラーシヤーブに起源が求められるようになる。

以上より、14世紀以降のペルシア語史書においてセルジューク朝の起源に関する叙述が再登場する原因は、普遍史叙述の変遷にあると言える。オグズ・ハーン説話を普遍史に採用し、トルコ諸民族の系譜を明らかにしようとしたラシードは、諸王朝の起源をオグズの末裔とし、その文脈でキニク氏族起源説を採用した。一方ムスタウフィーは、『王書』の文脈を重要視したため、セルジューク朝にキニク氏族とアフラーシヤーブという2つの起源を持たせた。このように史家の歴史認識の変容に伴い、王朝の起源への関心が高まった結果、セルジューク朝史像が変遷したと言えるのである。

6. 13世紀後半におけるジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交関係

岡本 和也

13世紀後半、ジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交関係は、ビザンツ帝国を經由して行われていた。本発表では、主にマムルーク朝史料に基づいてこの外交史の整理を行った。そしてこの外交関係と、マムルーク朝とビザンツ帝国の外交関係を比較すると、ジョチ・ウルスとマムルーク朝の間で交換された使節と、マムルーク朝とビザンツ帝国の間で交換された使節の時期はおおよそ一致していることが指摘できる。

また、主に1260年代前半と1280年代前半において外交使節が派遣されており、その二つの時期のマムルーク朝とビザンツ帝国の外交関係を検証すると、主に商業（特にマムルーク）に関わる友好的な条約が締結されていたことが指摘できる。この二つの時期にジョチ・ウルスからマムルーク朝に派遣された使節に関する史料の記述は、イスラームを強調したものとなっており、これもこの二つの時期に共通する特徴と言える。

この二つの時期に関して、ジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交的立場を検証すると、1260年代前半においては、マムルーク朝がモンゴルの権威を求めており、1280年代前半においては、ジョチ・ウルスがイスラームの権威を求めていることから、その外交的立場は変化していたと考えられる。

これらに基づいて、ジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交関係の意義を考察すると、マムルーク貿易がその要因として考えられる。その根拠としては、マムルーク朝とビザンツ帝国の間で締結された条約が、ジョチ・ウルスの支配下にあったスダクにおけるマムルーク貿易を強調していたことが挙げられる。また、マムルーク朝史料には、ジョチ・ウルスとマムルーク朝の間でも何らかの商業協定が結ばれていたことを示唆する記述が成されており、イタリア史料の記述などによると、ジョチ・ウルスがこのマムルーク貿易によって、大量の銀を獲得していたことが推測できる。

以上より、マムルーク朝とビザンツ帝国の外交関係による東地中海の安定がもたらしたジョチ・ウルスとマムルーク朝の外交関係は、マムルーク朝にはマムルークという必要不可欠な人材をもたらし、ジョチ・

ウルスには銀をもたらすという両国家にとって非常に重要な外交政策であったことが明らかとなった。

今後は、この黒海・東地中海をめぐる地域において、この外交関係を中心として政治的・経済的に結びつけた東地中海地域圏の構築を試み、その歴史的展開を明らかにしていきたい。

7. マムルーク朝のズィンミー政策：700/1301年の事例を中心に

辻 明日香

バフリー・マムルーク朝スルタン・ナーシルの治世、1301年に、カイロでズィンミーを・取り締まる法令が發布された。この出来事はバフリー・マムルーク朝期のほぼすべての年代記において言及されているが、これはズィンミーに関する事件としては稀な例である。

事件のきっかけは、ハフス朝の宰相がカイロを訪れたことにあった。宰相はエジプトにおけるズィンミーの繁栄ぶりに驚愕し、スルタンとアミールに抗議した。宰相の助言に従い、アミールらはズィンミー待遇に関するカーディー法廷の開催を決定した。この背景には、ズィンミーの生活を取り締まることで、1299年にシリアでモンゴル軍に敗北したことにより失墜したマムルーク朝の威信を回復しようとする、政権側の意図が窺われる。

法令の目的はズィンミーを低くて卑しい地位に据え置くことにあったが、法令の内容自体はウマルの誓約を基にした、伝統的なものである。しかし、本来は伝承であったウマルの誓約が実際の契約としてズィンミー側の代表者との間で締結されたこと、キリスト教徒は青色のターバン、ユダヤ教徒は黄色のターバンを着用するよう命じられたことは、画期的な出来事であった。法令がカイロ・フスタートで發布され、マムルーク朝領域全土においても発令されると、各地でズィンミーに対する暴動が起きた。色付きのターバンを着用していない者は襲撃・略奪の対象となり、教会は破壊された。先行研究はこの法令はすぐに風化したと看做しているが、実際にはその後も有効であったことは、1307年にクースで起きた教会破壊事件から確認できる。

マムルーク朝において、ウマルの誓約は契約として機能し続けた。また、ターバンの色の差別化が撤回されることはなかった。このように、1301年の決定は社会に多大な影響を及ぼしている。これはアイユーブ朝期までとは明らかに異なる諸相である。これほどまで法令の内容が社会に受容されたことは、1301年前後にズィンミーを取り巻く環境が大きく変化していたことの現れではないだろうか。13世紀末からマムルーク朝は異端の討伐など、スンナ派政策を推進している。また13世紀後半はタリーカの隆盛期であり、この時期スーフイズムが急速に社会に浸透している。スンナ派・イスラム化が進むマムルーク朝社会においてムスリムとズィンミーの関係も変化していったといえよう。

8. 19世紀前半コングラト朝ヒヴァ・ハン国の徙民政策の展開

塩谷 哲史

中央ユーラシアの歴史的展開において、様々な集団の移動は非常に大きな意味を持ってきた。本発表では、16世紀以降地域として周縁化する中央ユーラシアにおける諸集団の移動の一例として、19世紀初頭ホ

ホラズム地方に成立したコングラト朝ヒヴァ・ハン国（1804 - 1920 年）の徙民政策に焦点をあてた。この政権は、それまでの遊牧民主体の分権的な性格をもつ政権とは異なり、定住化したウズベク諸部族出身のハンが、都市定住民サルトの支持を得て、中央集権的体制を築き上げたとされる。そして政権成立当初から、ホラズム地方周辺に居住する諸集団をホラズム地方内に移動させ、定着させる徙民政策を行っていた。しかし、この政策の展開過程を検討し、かつその背景にあった政治的、経済的諸条件を明らかにした研究はこれまでにない。そこで、本発表においては、以下の点に注目しつつ、コングラト朝政権の徙民政策の重要性を検討した。

①徙民政策はどのような過程で実施されたのか。

②徙民政策を実行しえた政治的・経済的背景とは何か。

③徙民政策の結果、ホラズム地方の諸集団の居住状況はどのように変化したのか。

コングラト朝政権の徙民政策は、すでに政権成立当初からウズベク、トルクメン、カラカルパクを対象に行われていた。1810 年代後半からコングラト朝政権は、ホラズム地方内において運河の延伸・建設を行って、新たな灌漑地を確保した。さらに、同時期からコングラト朝ハンたちは、ホラーサーン方面を中心に盛んな対外遠征を行い、他地域に居住する集団に移住を促し、戦争捕虜を新たな灌漑地に入植させた。こうして、コングラト朝の徙民政策は、開発と対外遠征によって支えられながら展開された。その結果、トルクメンやカラカルパク、ジャムシーディー族、また戦争捕虜として連れてこられたイラン系住民、ブハラ領住民などの諸集団が、新たにホラズム地方へ定着することになった。その中で、半農半牧であったトルクメンはホラズム地方北西部、同じくカラカルパクはアラル地方を中心としたホラズム地方北東部に定着し、定住化が進展していった。1924 年の民族共和国境界画定による境界線は、ほぼこの徙民政策によって創出された諸集団の居住状況に沿っている。このことは、19 世紀前半に展開されたコングラト朝政権の徙民政策がホラズム地方に与えた影響力の大きさを物語っている。

第 5 部会

1. 19 世紀半ばのインド洋西海域におけるドレイ交易者の活動実態：

イギリスによるドレイ交易監視活動との対応を中心に

鈴木 英明

19 世紀のインド洋西海域における異文化接触の問題に関心を持つ発表者の注目する事例がドレイである。インド洋西海域のドレイ、ないしはドレイ交易に関する従来の研究は、ドレイそのもの、あるいはその交易の廃止を求めるイギリスの活動を中心的な題材として取り上げてきた。しかし、ドレイという商品はもとよりどこかに存在するのではなく、ある人々が別の人々を奴隷として売買する時点から存在するのだから、そのようなドレイ交易の担い手は、ドレイに関する諸問題の中心に位置づけられるべき存在であろう。

このようにドレイ交易の担い手への注目の重要性を表明したあと、本発表では、とりわけイギリス側の史料で頻繁に言及されるノーザン・アラブという人々の活動実態を、1860 年代初頭までの彼らの活動をイ

ギリスによる対奴隷交易活動などの時勢の変化の中で明らかにした。このノーザン・アラブとは、ペルシア湾から東アフリカに定期的にやってくる人々の総称とも言えるものである。

考察の結果、次の諸点が明らかにされた。1. イギリスの対奴隷交易活動に関する文書では、つねに奴隷交易の遂行者としての側面が強調されているが、旅行記や発表者による現地での聞き取り調査からは、むしろ、彼らは海域間の定期的な往復活動の中で、多様な役割をスワヒリ社会やペルシア湾と東アフリカとの間の交流で担っていた側面があること。2. 1850年代以降、条約による法的な規制やイギリス艦船による拿捕などによって、イギリスの対奴隷交易活動が監視から廃絶へと移行するなかで、彼らは、武力や操舵技術だけに頼るのではなく、条約を柔軟に活用しながら、ペルシア湾への奴隷輸送は減少しながらも継続していったこと。ただし、そうした抵抗の形態が、彼らがイギリスの用意した秩序、枠組みの中に入り込んでいくことと表裏一体であった点には注意を喚起したい。3. 50年代後半以降、監視活動の強化、あるいは東アフリカ海域での交易の可能性——ザンジバルなどでのクローヴプランテーションの拡大や大西洋やブルボン等などへの奴隷輸送者との接触——から、彼らがより積極的に東アフリカ海域内の交易に従事していくようになること。このような東アフリカ海域内での彼らのドレイ交易に、規模の拡大化、そして専門化の傾向が見られた。

2. 17世紀のインド洋西海域世界におけるイエメンの対外関係

栗山 保之

1636年に、1538年以来イエメンに駐留していたオスマン朝勢力の排除に成功したザイド派イマーム政権は、その支配領域をイエメン北部の山岳・高原地域から紅海沿岸地域へと拡大し、さらにアラビア海沿岸地域を含むイエメン南部全域を支配下に治めると、1659年にはオマーンとの境域地帯であるイエメン南東部のハドラマウト地方へ派兵して、その軍事的・政治的影響力を急速に伸張した。この結果、17世紀の南アラビアの政治情勢は大きく変容することとなり、その余波はインドやイランにまで及んだのであった。

本報告では、主としてイエメン・南アラビア関連の同時代アラビア語史料に依拠して、この変容著しい17世紀のイエメンを統治したザイド派イマーム・ムタワツキル（在位1644—76年）の治世を中心に、ペルシャ湾、アラビア海、紅海を媒体として形成されたインド洋西海域世界において、イエメンがどのような対外的な関係をもっていたのかを検討した。

具体的には、インドのムガル朝、イランのサファヴィー朝、そしてオマーンのヤアーリバ朝という、いずれも17世紀のインド洋西海域世界の大王朝を取り上げ、これらの諸王朝とイエメンとの関係をそれぞれ分析し、それらの諸関係が全体としてインド洋西海域世界において如何なる構造をなしていたのかを概観した。

この結果、イマーム・ムタワツキルは使節の往還や親書および贈物の交換を通じて、ムガル朝皇帝アウラングゼーブおよびサファヴィー朝シャー・アッバース二世と良好な通交関係を構築・発展させることに

成功する一方で、スルターン・ブン・セイフー世が統治するヤアーリバ朝とはズファール地方領有問題やオマーンの海洋活動をめぐって対立していたことを明らかにした。

3. アラウィー・イルシャーディー論争と中東の指導者たち：1930年代前半における仲裁の試み

山口 元樹

アラウィー・イルシャーディー論争とは、20世紀の初めに、シンガポールやジャワといった東南アジアのハドラーミたち（アラビア半島南部ハドラーマウト地方の出身者とその子孫）の間で起こったサイド（ムハンマドの子孫）の特殊性をめぐる争いのことである。ハドラーマウトでは、アラウィーというサイドの一族が社会的に優位な地位を占めていた。しかし、東南アジアのハドラーミたちの中では、アラウィーたち（もしくはサイド全般）の特殊性が平等というイスラームの理念に反すると主張する者たちが現れた。彼らは1914年にイルシャードという団体を設立し、それ以後1930年代までアラウィーたちと論争を繰り返した。

本発表では、1930年代前半にラシード・リダーやシャキーブ・アルスラーンらによって行われた、この論争の仲裁の試みを考察の対象としている。そもそも、この論争の発端となったのは、リダーやアフマド・アッ＝スールカティー（スーダン出身のイルシャードの指導者）といった、ハドラーミたちの外部に存在する権威が、アラウィーたち（もしくはサイド全般）の特殊性に反対する者たちを支持したということであった。ところが1930年代前半の仲裁の試みでは、リダーもアルスラーンもイルシャーディー側の主張を支持しなかった。この理由として、この時期に懸案となっていた問題が論争の発生当初とは異なっていたことが考えられる。中東の指導者たちは、アラウィーたちがそもそもサイドではないというイルシャーディー側の主張を特に認めなかった。これは論争の本来の関心であるサイドの特殊性とは無関係な内容である。

先行研究では、この論争の本質は、東南アジアのハドラーミ・コミュニティ内部における主導権争いだとされてきた。しかしながら、中東の指導者たちの示した判断から、彼らがこの論争をあくまでサイドの特殊性をめぐるものとしてとらえていたと言える。それに対するイルシャーディー側の反応からは、そのような判断が無視できないものであったことが明らかである。このことから、この論争には、東南アジアのハドラーミ・コミュニティ内部の主導権争いという側面だけではなく、より普遍的なムスリム全般に関わる問題としての側面も並存していたと言える。

4. ラーヤ・トゥール地域の歴史：考古資料から

川床 睦夫

4世紀頃からシナイ半島は初期キリスト教修道制の中心地となった。南部の中央高地シナイ山の周辺、ワーディー・フィーラーン（パラン）、南西部のライソウ（ラーヤ・トゥール地域）を中心に発展し、広く世界に知られるようになった。シナイ山の麓のワーディー・アルバイーン、パラン周辺の山中、南西部の

アブー・スワイラの岩山に隠修士，修道士たちのセルが営まれた。アブー・スワイラでは，教会かと思われる複数の部屋を持った4つの岩窟と100以上の単室セルを確認した。

6世紀になると，遊牧民による修道士襲撃が頻発した。年代は定かではないが，シナイ山とライソウの沙漠でそれぞれ40名の修道士が虐殺されたと伝えられている。そして，半ばには，シナイ山とライソウの修道士たちの陳情に応じて，ビザンティン帝国ユスティニアヌス帝がクルズム（スエズ）に聖アタナシウス教会，ライソウに聖ヨハネ修道院，シナイ山にシナイ山修道院（現在は聖カタリーナ修道院の名で広く知られている）を建立・寄進した。同じ頃に港市ラーヤが建設されたと考えられる。

7世紀前半にイスラームが興ると，預言者ムハンマドはシナイ山修道院にキリスト教徒とその権利，財産を保護する書簡を送った。聖カタリーナ修道院文書の中には，1137年などに書き写された預言者の書簡が6通保管されている。

8世紀になると，エジプトで作られた多数のグラス・ウェイトがラーヤ遺跡から出土するようになる。しかし，土器，陶器などはシリア・パレスティナ地域のもものが中心である。そして，9世紀以降，多量のラスター彩陶器などのイスラーム陶器，ガラス器などが出土するようになるが，これらも同様の傾向を示している。

この後，12，13世紀頃に港機能がラーヤからトゥールに移動するまで，港市ラーヤはシナイ山（聖カタリーナ）修道院，ライソウの聖ヨハネ修道院，パラシ（ワーディー・フィーラン）の修道院の外港として，また北紅海航路の主要港として，すなわち海のルートと陸のルートの結節点としての役割を果たした。

この地域がイスラーム化された年代は明らかではないが，ファーティマ朝期であるとする説が一般的である。しかし，ラーヤ遺跡の城塞区で発見されたモスクは10世紀以前には存在していたと考えられる。

本発表では，初期イスラーム時代のラーヤ・トゥール地域の歴史を中心に，考古資料を用いながら考えることとする。

5. 藤田幽谷・藤田東湖著『群書抄出 萬国文字攷』（国立民族学博物館蔵）に記されたアラビア文字の

由来について：江戸時代後期における中東イスラーム知識受容の一断面

西尾 哲夫

『群書抄出 萬国文字攷』は，尊王攘夷の理論的支柱とみなされている水戸藩の藤田東湖（1806～1855）が若年の頃，父の藤田幽谷（1774～1826）と共に編んだ世界の文字に関する書物である。同書には東アジアで用いられていた文字だけでなく，ローマ字やロシア文字など西洋の文字についても記載され，さらにアラビア文字についても藤田東湖の直筆によって紹介されている。同書は江戸時代末期における海外情報，特に中東イスラーム世界に関する知識の受容についての新発見の資料である。

同書は和綴じによる総116頁の和書である。「梅巷百書」の蔵書印があり，「梅巷」は梅香の意で，著者である藤田親子が居住していた水戸市梅香にちなんだものと考えられる。同書の制作時期は明示されていないが，巻末の藤田幽谷による覚書によれば，江戸の「正気堂」と名づけられた書齋で執筆されたとあ

り、藤田親子が江戸でいっしょに居住した時期が限られていることから、おそらく文政9年（1826）の3月から8月にかけての時期であったと推定される。藤田幽谷の最晩年であり、東湖は21歳であった。

同書で紹介されている文字種は、説明と文字サンプルがある文字種と説明のみの文字種に分かれる。前者にはカタカナ、いろは、パスパ文字、天竺字（梵字）、回回字、ウィグル文字、ロシア文字等があり、後者には琉球国、安息国、契丹、女真、西夏、蒙古、漢字の文字種が含まれる。時代状況のためであって、ロシア文字に関する説明が他に比べて詳しい。契丹、女真、パスパ、蒙古、ロシアの文字については幽谷が、その他の文字については東湖が担当して筆をとっている。

同書の中に記されたアラビア文字の由来については、元末明初の陶宗儀による『書史会要』巻之八「外域」に載せられたアラビア文字である。同書には洪武9年（1376）の刊本（洪武本）、四庫全書（乾隆46年1781）の刊本があるが、後者は朱謀壘による続編一卷が付録され、回回字を含む全ての文字サンプルが省略されている。洪武本には再版がある（関西大学内藤文庫所蔵本は崇禎2年1629の刊本等）。また洪武本以前にも写本のかたちで伝世していたと考えられる。日本では江戸時代に多くの藩において書写され、いくつかの異本が現存している。『群書抄出 萬国文字攷』は江戸時代後期における中東情報の国内での流通について考察するための貴重な資料と言えるだろう。

6. 不気味な恋人：前イスラーム期アラブの無頼詩人、タアッバタ・シャッランによる慣習的モチーフの転倒 山本 薫

前イスラーム期アラブの部族中心主義的な規範や価値観から逸脱した作風で知られるサアーリーク（無頼・盗賊）詩人たちの作品は、当時の詩的慣習を逆手に取ることで、中心と周縁、英雄と反英雄といった二項対立の境界線を攪乱・侵犯するという意味での転倒 inversion の試みに充ち満ちた、魅力溢れるさかさまの世界である。この発表では、代表的なサアーリーク詩人、タアッバタ・シャッランの一作品において、「タイフ・アル＝ハヤール（恋人の幻影の訪れ）」という慣習的モチーフがいかに転倒・異化されているかを、一般的な部族詩人の諸作品と比較しつつ分析した。

アラブの古典定型詩は、離別した恋人への思慕を詠むナスィーブ（恋歌）から起こされるのを常とし、沙漠を旅する詩人のもとに夜毎現れては追憶の痛みを与える恋人の幻影は、ナスィーブにしばしば登場するモチーフとして知られている。幻影はそれ自体、不気味な存在ではあるのだが、具体的な名をそなえた特定の女性の姿をとって詩人の愛惜を誘うという点において、生き活きとした人間の相貌を失うことはない。それに対し、タアッバタ・シャッラン作品に登場する異形の幻影は、通常ナスィーブの語りを踏襲していると見せかけながら、実は人間ならざるものたちの世界へと読者を導き入れる。最後に、今回の発表で一端を示したような転倒した女性像および男女の関係性は、サアーリーク詩全般に認められる特徴であることを指摘し、それが部族詩人にとっては“試練の場としての沙漠”がサアーリークにとっては“アジールとしての沙漠”であるという転倒した空間感覚、さらには英雄ならざるものが英雄として振る舞う

という、サアリーク詩最大の持ち味である“矛盾と逆説のヒロイズム”にも繋がっていくことを示唆して結びとした。

7. 鳥物語の系譜

森下 信子

西暦8～12世紀ごろまでのイスラーム世界の文学に数多くみられる「鳥物語」を中心とした鳥に関する語りを集め、そこに見出される共通点と相違点を示し、それをもとに物語に統一性をもたせている要素と、その統一性を維持しつつも多様性を生み出しているメカニズムについて考察を加え、それを図で示した。物語に統一性をもたせている要素は、七つの語りのパターン（監禁→忘却→覚醒→脱出、飛翔の旅、慣れた人（主人）の元へ帰る、集会→決定、知らせをもたらす、黒から白へ、求める鳥と求められる鳥）と鳥の種類・特性と物語の寓意性の3点であり、語りのパターンは、一つの物語の中で複数用いられるのが常である。相違性は、鳥の種類の変化、鳥のイメージの変化、数的変化、語彙・言い回しの変化、焦点の変化、意味的变化の6点において起こるが、特に物語の寓意性とその相違性に関与する分は大きい。寓意性は、啓典伝統のモチーフ、民俗的モチーフ、支配的思想から形成された文学的伝統を含めた全総体が、物語の著者の個人的体験に照らして再解釈されるとき生み出される新しい物語の特性である。それは、固定化された伝統を動力に変える潜在力を持ち、著者の独創性に支えられて語りに新たな意味を与える。

例えば、民俗的モチーフである巨大な霊鳥シーモルグ／アンカーは、かつて人間との緊密な関わりをもつ存在として語られてきたが、やがて「名前はあるが見えない」ものの代名詞へと変容していく。クシャイリー(d. 1072)は「スーフィ用語集」の中で、アンカーを名前はあるが本質(‘ayn)がないため「質料」として解し、ジュルジャーニーも「定義集」で、それを物体の世界が開かれる原子のようなもの、と説明する。これに対し、バスターミーを初め様々な鳥物語の中で、シーモルグ／アンカーは諸鳥類の王とされ、唯一神の比喻としての地位を確立しており、これは例えば同じスーフィでもクシャイリーの解釈とは対極的である。さらにそこでは、シーモルグ／アンカーは人の至ることが出来ない島の宮殿に住むという、神話と啓典(解釈)的モチーフが融合した語りが採用されているのである。

反省点としては、時間配分が完全ではなかったこと、質問者により良く理解してもらえるような回答を簡潔にその場で提示できなかったことが挙げられるが、これは今後の課題としたい。

8. ガザーリーの「瞑想(tafakkur)論」に関する一考察

加藤 瑞絵

アブー・ハーミド・ガザーリーの主著『宗教諸学の再興』の第4巻第9書「瞑想の書」を中心に、彼が述べるタファックルという行為について考察を行なった。一般にスーフィズムの文脈において、タファックルは「瞑想」と理解され、ガザーリーの場合も同様の文脈で理解されてきた。ガザーリー自身の定義(第3のマアリファを獲得するために、心の中に2つのマアリファを持ち込むこととして定義される。これは三段論法による推論として捉えられる)を踏まえ、特に「推論的瞑想」とも呼ばれてきた。しかしながら

「タファックル」という言葉は、スーフィズム以外の文脈でも用いられてきた。自然界の事物や現象についての自然学的探究を示す言葉としての用法と、人間の内部感覚の1つである思考能力を示す言葉としての哲学的な用法である。ガザリーのタファックル論には、これらスーフィズム以外の文脈からの影響が伺える。また、「瞑想の書」の議論を検討すると、「瞑想」（「目を閉じて心を静め、無心になったり想念を集中させたりすること」『大辞林』より）という言葉には収まり切らない要素も含まれるように思われた。本発表では、これまで十分に検討されたとは言えないスーフィズム以外からの影響や、「瞑想」という訳語の適切さを検討することに重点を置いた。

ガザリーはタファックルを①人間に関わるものと②神に関わるものに区別する。①は自己の行為や性質がムスリムとして善いものであるようにするための「熟慮」「反省」として捉えられる。これはスーフィーの自己省察に連なるものであろう。①の実践により様々な悪しき性質を離れ、善良な性質を身に付けた後に②へ進むことが可能となる。②は自然界に存在する神の創造物について知ることから、神の偉大さを知るための「観察」「熟考」として捉えられる。人体構造などの詳細な記述を含め、これは自然学的探求としてのタファックルを反映している。このように①、②は異なる性質のものであるが、共にタクリード（「瞑想の書」においては、他者からの伝聞のみに拠る認識）の段階を超えるための行為である点で共通している。ガザリーが示す具体例には、論証形式に則していないものが多いが、タファックルを通して獲得される認識の確実性を求めて、理想型として三段論法の推論が想定されていると考えられる。そこには彼の論理学への信頼が読み取れるであろう。

第6部会

1. トルコのスーフィズム：イブン・アラビー学派に属するブルセヴィーの「存在の五次元説」に着目して

ダニシマズ＝イディリス

イブン・アラビーの思想が、トルコのスーフィズム（とりわけスーフィズム思想）の中核である。これまでの研究のなかでは、トルコにおける教団としてのスーフィズムの様態が明にされたが、イブン・アラビーの思想がどのように解釈され、発展したかという点に関する研究は皆無に近い状況である。

発表者は、トルコのスーフィズム思想研究におけるこの間隙をうめることを最終的な目的とするが、本発表では、イブン・アラビー学派のトルコ世界における主な信奉者の一人であるイスマーイル・ハック・ブルセヴィー（Bursevi）の思想のうち「存在の語次元説」に関する解釈に焦点を合わせることによって、同学派の一面を明らかにすることを試みる。

本発表においては、彼と先行するスーフィーたちの次元の配列を比較しながら、両者の説の間における異同を考察し、そこに現れた次元のとらえ方や方法論について論じ、結論においては、ブルセヴィーの思想の特徴について述べる。発表全体の内容の概要は、以下のとおりである。

1. ブルセヴィーは18世紀に生きた人物である。活発な生涯を送った彼は、三大大陸に跨る広大な地域

を持つ当初のオスマン朝の大半の領土を旅しながら、一方において多作の学者であった。100 点を超える膨大な著作を遺し、多くがいまだに愛読されている。中でも『ルーフルベヤーン（明証の書）の魂』と『存在の五次元説の書』が重要である。

2. 存在一性論を説明する際に使用される重要な方法である存在の五次元説は、万物が神から存在に至る 5 つの次元に現れる過程とする思想である。存在一性論に関する著作の中で扱われてきた同説についてブルセヴィーは、『存在の語次元説の書』という注釈を遺している彼は、同学派のスーフィーたちによる次元説を引用し、自分自身による配列も提案する。

3. ブルセヴィーの思想の特徴は、次の二点において摘要できる。第一は存在を二つの観点から捉えたことである。つまり、一方では、神に視点を置き、他方では被造物に視点を置いて、前者を次元、後者をアーレムと呼んだ。存在を二つに分けるのが、彼の獨創性である。第二は、次元説を、倫理的に捉え、そこで得た倫理的な規則を、教団のシャイフとして弟子を指導するときに、現実の世界に結び付けて応用したことである。

2. 教団組織としての「タリーカ」の成立：19-20 世紀初頭エジプトにおけるタリーカの制度化とその意義

高橋 圭

本発表では史料における「タリーカ」という言葉やスーフィー教団を示す言葉に注目しながら、19 世紀初頭から 20 世紀初頭エジプトにおけるタリーカの組織化の過程を追った。

19 世紀初頭まではタリーカは個人の学ぶ「道」のことであり、集団を表す言葉ではなかった。特定のタリーカを名乗る集団は存在したものの、それらは「教団組織」と呼べるようなまとまりを欠いていた。だが 1812 年の公認教団制度の成立以降タリーカは一つの教団として組織化する道を歩み始めることになった。制度化によって一つのタリーカを名乗るシャイフは一人だけとなり、またシャイフはそのタリーカを名乗る集団のリーダーとして責任を負わされることになったのである。そして遅くとも 1880 年代までには、現在のようにタリーカはスーフィー教団という社会集団を表す言葉として使用されるようになっていた。

1895 年のスーフィー評議会の設置によってタリーカはより公的な形で国家に管理されるようになった。そして多くの新興タリーカが独立を求め、認可を受けた。ただしこうした認可を巡ってはタリーカ間の対立が頻発し、評議会は必ずしも満足のゆく答えを示すことができなかった。本発表の後半ではそうした対立の事例としてハビービーヤ教団のリファーイーヤ教団からの独立騒動を取り上げて分析し、タリーカの組織化がスムーズには運ばなかった状況を明らかにした。この騒動ではハビービーヤ教団が独立の根拠として主張したタリーカ＝教団組織という認識が、本来はそうした組織化を推し進めていたはずの体制をかえって困惑させるという皮肉な結果を生むことになったのである。

結びではタリーカの「近代性」の問題について考察を行った。ネオ・スーフィズムに関する議論などを中心にして、タリーカの「近代性」の要素の一つとして組織性が指摘されている。こうした議論ではしば

しばそうした組織性がタリーカやその創始者の思想的革新性などによって生まれたとされてきた。しかし本発表では組織化は必ずしもタリーカの内在的展開の結果ではなく、むしろそれを取り巻く社会的・制度的側面も重視すべきであると結論付けた。さらにはそもそも「組織性」をタリーカの「近代性」や「革新性」の証としてみなすことも妥当なのかという疑問も提示した。

3. オスマン帝国期のスーフィズム：ボスネヴィーを中心として

東長 靖

20世紀中葉には、13世紀半ばで生命を終えたかのように言われていたスーフィー思想の伝統が、実はその後も脈々と続いていたことを示したのは、H. コルバンであった。彼らの努力によって、「サファヴィー朝ルネサンス」という言葉に象徴されるような12イマームシーア派・イラン世界における思想の発展が明らかにされた。これに対し、スンナ派世界におけるその後のスーフィー思想の発展を広範に述べた著作はいまだに存在していない。

本発表は、このような研究の現状において、オスマン帝国期スーフィズム研究、イブン・アラビー学派研究、オスマン帝国期イブン・アラビー学派研究の現状把握を行うとともに、同学派の主要なメンバーであるアブドゥッラー・ボスネヴィー (d. 1054/1644) についての基礎的調査として、彼の生涯と著作の確定を目指したものである。

オスマン帝国期のスーフィズムに関しては、1990年代から（とくに2000年以降に）M. カラおよびマルマラ大関係者の研究によって、全体像が明らかにされつつある。但し、その重点はタリーカにあり、スーフィズムの思想的検討はほとんどなされてきていない。

イブン・アラビー学派研究については、1953年のH. Z. ユルケンの研究を先駆として、70年代以降ナセル、コルバン、チティックらが概説を行ってきた。アラブ、ペルシア文化圏における同学派の広がりについては夙に知られてきたが、南アジアおよび東南アジアについても、主だったメンバーを特定できる段階まで来ている。

オスマン帝国期のイブン・アラビー学派についても、主だったメンバーとして40名程度を数え上げることができる。但し、イスマイル・ハック・ブルセヴィー (d. 1137/1725) およびイスマイル・アンカラヴィー (d. 1041/1631) を除くと、殆ど思想研究はなされていないばかりか、各々の思想家がどのような著作を遺したのかの包括的な調査もなされていない。

このような状況下、発表者は、トルコ語で初めて、イブン・アラビーの主著『叡智の台座』全体への注釈を施したボスネヴィーに焦点を合わせることにした。今回の発表では、彼の生涯を、同時代資料・後代の資料群を用いて明らかにするとともに、トルコの図書館を中心にしつつも他の諸国をも含む写本調査を行い、約70点に及ぶ著作リストを作成した。これは、これらの写本を用いた思想研究に進むための基礎的作業と位置づけられる。

4. 19世紀半ばのエーゲ海地域社会における人的ネットワーク：非ムスリム匪賊の活動を中心に

吉田 達矢

貿易都市イズミルを中心とするエーゲ海地域社会にとって19世紀半ばは、ヨーロッパ諸国による資本主義経済の進出や、オスマン朝政府による中央集権化政策の実施などにより、地域社会が大きく変容しつつある時期であった。従来の研究では、地域社会の変容に対する住民の対応の一つとして、ムスリム匪賊(ゼイベキ)の活動が主な考察の対象とされてきた。しかし18世紀末より、イズミル周辺では正教徒の人口がオスマン帝国各地からの出稼ぎや移住により大幅に増加していたのであり、ムスリム側からの考察だけでは十分ではない。そこで本発表では、1840年代よりイズミル周辺で活動し始める非ムスリム匪賊、彼らの中でも特に名が知られていたカトゥルジュ・ヤーニ KatırcıYâni の活動や人的ネットワークについて、史料としてオスマン語文書や旅行記を利用して考察した。

ヤーニが1852年8月から官憲側に投降した1853年10月までの間に行った事件は、8つ確認できる。略奪対象は、主にヨーロッパ諸国の者、オスマン帝国出身であっても各国の庇護下にある者、サモス島出身の正教徒であったことから、非ムスリムでも略奪対象となったこと、イズミル周辺に進出しようとするヨーロッパ諸国の者等にとってヤーニは邪魔な存在であったことなどを指摘した。

またヤーニの協力者に関しては、彼には、イズミル近郊のムラの住民や、街道沿いで雑貨屋などを営む、正教徒の協力者が一番多かったものの、他にもムスリム、下級官吏(警察官)、ヨーロッパ諸国の者などの協力もあった。このことから、ヤーニの活動を支援することによって、地域社会に介入し進出しようとするヨーロッパ諸国の者がいたこと、またヤーニは、出身や職業も異なる多様な者たちにそれぞれ匿う者や情報提供者など役割分担をさせ、犯罪組織ともいえるものを形成していたことなども明らかになった。

ゼイベキらムスリム匪賊とヤーニの類似点としては、社会的匪賊(義賊)として捉え得る側面があったこと、相違点としては、ヤーニにはヨーロッパ諸国の者も含めた非ムスリムとの密接な繋がりがあったことなどが挙げられる。

5. トルコ共和国初期におけるキリスト教宣教団の活動の転換：教育政策との関連から 高畑 祥子

19-20世紀のキリスト教宣教団に関する先行研究は欧米でもトルコでも多数行われているが、その殆どがオスマン帝国末期を対象としたものであり、トルコ共和国を対象としたものは稀少である。しかし、宣教団の活動とそれに対する反応を包括的に把握するためには、より長期的な視野でこの問題を見ていく必要がある。また、宗教教育に対する規制により、宣教団が「宣教」という目的を奪われた時期であるという点からも、共和国初期は重要な意味を持っている。

報告では、トルコ共和国の教育政策の中からミッション・スクールに関わる法に注目し、それに対するミッション・スクールの反応について分析を行うことにより、共和国初期における教育政策とそれに伴う宣教団の活動方針の変化から、転換期における両者の関係性をさぐることを試みた。事例としてはオスマン

帝国、トルコ共和国において最大規模だったプロテスタント宣教師団アメリカン・ボードと、そこから独立した宣教師が設立したイスタンブールのロバート・カレッジを取りあげた。

政府が出した法や通達からは、政府の外国学校に対する姿勢が「政治的影響の排除」、「文化的影響の排除」、「宗教教育の制限あるいは禁止」の3つに大別でき、これはオスマン帝国でもトルコ共和国でもほぼ一貫していたことが読み取れた。一方ミッション・スクールは、学校に学生が集まってくることで、政府が自分たちに規制を加える一方で近代教育促進のための協力を求めてくることなどから、「自分たちの存在は求められている」という認識を持ち、「学校の棲み分け」と「目的の転換」により共和国内での存続を図った。「目的の転換」は当初の目的である「信者を作ること」を「人格育成」へと転換させることであったが、実際には「人格形成」という名の下で学生の内的なキリスト教化が図られた。以上から、トルコ共和国成立後しばらくは、両者の根本的なスタンスは変化していなかったことを指摘した。

今後はこの転換が実際に影響を及ぼした様相を分析するために、方針の変化が現場にどのような形で反映されていたか、ミッション・スクールで学んだ人々が「人格形成」をどのようにとらえていたか、という問題について検討することを課題としていきたい。

6. 20世紀初頭イランの女性定期刊行物に現れた女子教育観と実際のカリキュラム 山崎 和美

20世紀初頭の女子校設立に対するイラン人の民間女性によるイニシアチブが女子近代教育(女子学校教育)成立の背景に存在するが、先行研究はこの点を見落としてきた。女性の活動に関する先行研究もほとんどがフェミニズムの視点からの分析である。従って、本発表では女子近代教育成立の背景を探るために、女子教育推進運動を展開した女性活動家たちの思想や行動が反映されている女性定期刊行物の記事を分析した。特に女性定期刊行物に現れた「女子教育」観と「女性に必要な知識」観について考察した。1910年代については以前発表したもので今回は1920年代を中心に報告した。

女性定期刊行物では、女子教育が必要であるという主張が繰り返された。こうした女子教育必要論の理由としては「イランの『進歩』『文明化』のために将来を担う子供たちに教育が必要だが、子供たちを教育するのは母親だから母親になるべき女性に教育が必要」「家庭内で子供や夫に『愛国主義』『イスラーム遵守』『道徳』を教えるのは女性なので女性に教育が必要」という言説が主流であった。

女性定期刊行物で女性に必要なと考えられた知識は家政書知識であった。この知識は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて出現し台頭した「都市新知識人層」が理想とする女性像「近代的イラン女性」に必要な知識であった。「近代的イラン女性」は、ブルジョア的な西洋の母性モデルが反映された、欧米的な近代的医学・衛生学・家政学を身につけた良妻賢母、主婦として家事使用人を管理する女性であるが、同時にイスラーム的な敬虔さや道徳心も身につけているものとして描かれた。その他愛国主義高揚のための知識、道徳教育・イスラーム教育のための知識、女性問題を認識するための知識などが女性にとって必要と考えられた。これらの知識は欧米の進歩的状況とイランの後進的状況やイラン以外のアジア・中東の状況と関

係付けられた。

女子教育必要論の論拠の選択、理想的な女性の役割観の選択、女性に必要な知識の選択、女子校のカリキュラムの選択を女性活動家は主体的に行った。女性活動家は、これらをイスラーム的社会規範・倫理観に抵触しない「イラン流近代様式」に「翻訳」して受容した。これは女子教育の正当性を認識させ社会的反発を回避するための女性活動家の主体的な「戦略」であった。これに即して、女子校カリキュラムの内容と女性定期刊行物の記事内容が選択された。

7. ペルシア語 *dāstan* を用いた動詞進行形について

横山 彰三

ペルシア語動詞の現在形は現在の行為・動作、習慣的動作、一般的真実を表す：

1) *čekār mikonid? – name minevisam*. 「何をしているのですか」「(私は) 手紙を書いています」

その一方で口語に於いては動詞 *dāstan/dār-*を用いて、進行形または完了しかかっている動作・行為を表す用法がある(Lazard 1992)：

2) *darid čekār mikonid? – dāram name minevisam*. 「何をしているのですか」「(私は) 手紙を書いています」

Windfuhr (1979)によれば、文法学者や文法書の多くは Keshavarz (1962)がいうように *malmus* (「実現された」の意) という名称で呼んでいる。また Yarshater (1970)では *modāvem* (「継続の」の意)あるいは *žāri* (「進行中の」の意) と呼んでいる。しかしこれらの説明は不十分、あるいは正確さを欠き、その点を Windfuhr (1979)でも指摘されているように、動詞 *dāstan* 自体が「所有」を意味する「静態(stative)の」動詞であるため進行形は意味的に不可能である。その点、英語と同様である。

本発表ではこれらの先行研究をふまえて、具体的には、①*dāstan* 進行形で使用される動詞のアスペクトによる分類、②なぜ *dāstan* 進行形の否定形が誤用とされるのか、についてさらに一步踏み込んだ説明を試みた。

8. 現代イラン・シーア派におけるホムスの払い手みる個人・宗教・国家の関係：アゼルバイジャンの

アハル市の数家族のケース

アレズ＝ファクレジャハニ

要旨未提出